

4003

近代中国研究センター

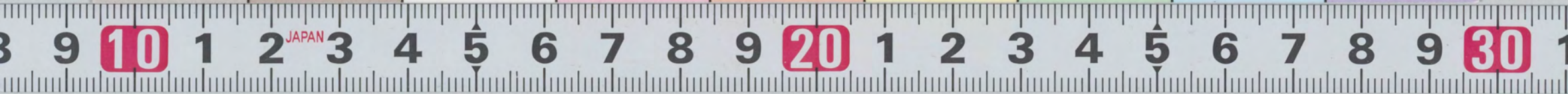
彙報

15

1971

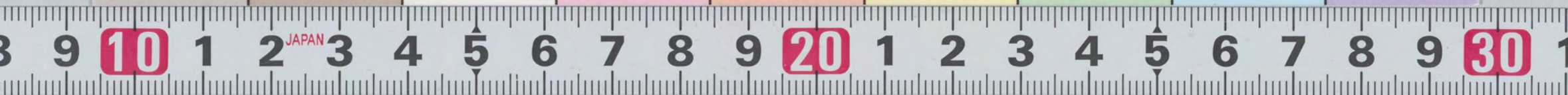


東洋文庫



も く じ

本庄比佐子：福建事変と中国共産党	1
長坂弘之：阿片雑記	14
『闘争』（江西）記事目録	17
中文論集内容目録（3）	25



福建事変と中国共産党

本庄比佐子

1

1933年11月20日に起ったいわゆる福建事変は、その反帝・反蔣的言辞の故に、福建省に直接的利害関係をもつ日・米をはじめとする帝国主義および国民政府にとっては、福建省を赤化させるものとして、中国共産党にとっては国民政府軍の第五次圍剿突破に可能性を与えるものとして、関係者の注目を集めた。しかし、そこに樹立された人民革命政府は、その主張に反して現実には何ら為すところなく、国民政府軍の攻撃の前に2ヶ月足らずであえなく崩壊した。

一方、中国共産党の統一戦線戦術に基づいて、中華ソヴィエト政府と工農紅軍は福建側と「反日反蔣の初歩協定」を締結したが、共産党は人民革命政府を敵視し、紅軍も支援行動に出ることなく、その壊滅を黙過した。この点をとらえて、「若干の歴史問題についての決議」は、当時の党指導部がとった極左路線の例に挙げている(1)。多くの中国革命史もまた、中国共産党の初期抗日民族統一戦線、あるいは五次圍剿時期の紅軍の軍事路線における極左路線の誤りとして、福建事変を記述している(2)。つまり中国共産党は1933年以来統一戦線政策を採用していたが、極左路線のために正しく適用されなかったにすぎない、ということである。ここから、中国共産党史における福建事変の問題を、党内対立に焦点を合わせて取上げる見方(3)が生まれる。しかし、それは中国革命史を発展的にとらえる観点ではない。統一戦線の内容は様々な客観情勢と関連して次第に発展していったものであって、最初から1937年の第二次国共合作に結実するような展望をもっていなかったのではないか。いうまでもなく、統一戦線の内容は、それぞれの時期において主たる敵が何であり、提携し得る階級・階層がいずれであるかによって異ってくる。それ故、この時期の統一戦線政策がいかなる観点から出ていたか、そして福建事変に対してそれが貫徹したのか否かが問題にされねばならない。

また、統一戦線が実現した場合には、当然それは当事者双方の動態によっても様々な結果を生む。福建事変においては、人民革命政府と中国共産党それぞれの側の事情が作用し合う面も考慮に入れなければならない。



以上のような観点から、本論においては人民革命政府の政策とその実際、および中国共産党の措置を通して、いわゆる下層統一戦線の内容をみてみたいと思う。

2

人民革命政府樹立に先立つ1933年10月26日、中華ソヴィエト政府および紅軍と福建省政府および十九路軍との間に「反日反蔣の初歩協定」(4)が締結された。それは11条から成っていたが、主な条項は次のとおりである。

1. 双方の軍事行動の停止。
3. 福建側による政治犯の釈放。
4. 福建側は一切の革命的組織の活動（民衆の抗日反帝組織や革命的民衆の武装組織の如き）に賛同し、出版・言論・集会・罷工の自由を許すこと。
5. 福建側は直ちに反蔣宣言を發し、反日反蔣の軍事行動の準備をすること。
8. 福建側の軍事配置が完了するまでは、双方は協定を秘密にすること。
9. 上述の条件が完成後、反日反蔣の具体作戦協定を別に定めること。

本協定の締結は、この年1月に中華ソヴィエト政府と紅軍が發した、三つの条件の下にいかなる武装部隊とも協定を結び、共同の抗日武装闘争を行う用意がある、という宣言(5)に基づくものであった。ソヴィエト区攻撃の中止、民衆の民主的権利の保証、民衆の武装、という三つの条件は、一見して明らかな如く、本協定の中に含まれている。第9項は、これらの条件が紙上の約束ではなく、実行を意味することを示している。このことはまた、民主的権利の保証と民衆の武装が、中国共産党の民族革命戦争遂行にとって不可欠の要素であり、いかなる同盟に際しても固持すべき、絶対に譲れない基本原則であったことを示している。

こうして、本協定の実質的内容は福建側に課せられた任務の規定ともいうべきで、これが実行されるまでは事実上両者の提携は存在しないも同然であった。また、第8項の規定が、対外的にはもちろん、双方の陣営内でも厳守された(6)ことによって、当事者にも敵側にもいかなる効力ももたないことになった。

諸条項のうち、第1項は当然直ちに実行に移された(7)が、他の点はどうかであったか。本協定の有効性は福建側の態度如何にかかっているのです、まずこの点から見てみよう。

3

数ヶ月に亘る陳銘枢の積極的な策動(8)の結果、福建省を基盤とする反蔣運動は、1933年11月20日福州で開かれた「中国全国人民臨時代表大会」(9)において突如表面化した。この大会は反帝反封建、南京政府の打倒、生産人民政権の樹立などをうたった「人民権利宣言」を採択し、国号を「中華共和国」、政府を「人民革命政府」とすることなどを決定した。さらに陳銘枢、李濟琛ら中心人物は国民党脱退を声明し(10)、これに第三党、社会民主党、国家主義派などの諸政党政派が参加して(11)、ここに従来の純然たる国民党の党内抗争としての反蔣運動とは異なった性格を示すに至った。

人民代表大会から2日後の11月22日、「政府成立宣言」を発して正式に「人民革命政府」が発足した。その顔ぶれは、政府主席兼軍事委員長・李濟琛、文化委員会主席・陳銘枢、経済委員会主席・余心清(代理)(12)、財政部長・蔣光鼐、外交部長・陳友仁、最高法院院長・徐謙、政府高等顧問・薩鎮冰ときまり、十九路軍を改称・改編した「人民革命軍」の第一方面軍総司令に蔡廷鍇が就任した。このほか戴戟、黄琪翔、李章達、何公敢らが11名の政府委員を構成した。また、各部・委員会の委員として第三党や社会民主党などのメンバーが配属されて、まさに寄合世帯の観が濃厚であった。

では、かれらの主張は如何なるものであったか。

当初の基本方針は人民権利宣言、政府成立宣言(対内宣言)、対外宣言(13)によって明らかにされている。人民権利宣言は、(1)新たな国家の基本的性格、(2)対内外政策の基本点、(3)国民政府の打倒の3点について13項目の箇条書きで記され、臨時憲法的な性格をもつものである。対内外宣言は内外両面の中国の現状を具体的に述べて、人民革命政府の使命を明らかにしている。これらは相互に重複しているが、要約すれば次の如くである。

国民政府は「買弁・軍閥・官僚・豪紳・地主の反革命政府」であって、蒋介石を筆頭に「公然と日本帝国主義と結託し、国家を売り、人民を残殺し」て民族を危地に陥れている。外に対しては「帝国主義者の中国統治を歓迎して惜まず」、このまま放置すれば中国は早晚「日本帝国主義者の独占に亡びなければ、国際帝国主義者の共管に亡ぶ」であろう。内には多数の人民が内戦と悪政による天災の被害で死亡し、生存している者も耕す土地は

なく衣食にもこと欠いているにも拘らず、国民政府はこれを救済せず、救済を主張する者は抑圧してしまう。

従って新たに樹立する国家は、「全生産人民の民主共和国」であり、その「最高権力は全国の生産的農民・労働者と、共同に社会機構を支持する商学兵の代表大会に属す」。そして「全国人民臨時代表大会の負託を受けて中華共和国の最高権を執行す」(14)るのが人民革命政府である。その政府の使命は、(1)民族の解放、独立、(2)国民政府の打倒と生産人民政権の樹立、(3)国内各民族の平等、(4)生産人民の自由平等の権利の保障、(5)帝国主義勢力の排除、軍閥打倒、封建制度の廃除と国民経済の発展、農民・労働者大衆の解放、である。また、具体的政策としては、(1)不平等条約の否認、関税自主の実現、(2)計口授田の実行、森林・砒山・河道・荒地の国有化、(3)民族資本の発展と工業建設の奨励、重要企業の国有化、(4)身体・居住・言論・出版・集会・結社・信仰・示威・罷工の自由、(5)人民の武装による国家の保衛、などがあげられる(15)。

以上のような主張や政策は、一言にして云うならば、社会民主主義的色彩の濃いブルジョア民主主義的思想を基盤にしている。普通選挙制による人民の政治参加、人民の権利保障、諸外国との平等の関係の樹立など、すべてブルジョア民主主義国家が原則的には認めているところである。また、計口授田や重要企業の国有化は、中国の半封建性を国家権力によって克服しようとする意図から出たものと考えられ、同時に民族資本の発展をうたっている点からみて、国家の統制下に資本主義経済の発展を図ろうとするものである。ここには社会民主主義的傾向が強いが、これは中国のような半封建・半植民地の後進国に生まれるブルジョア民主主義思想が当然もつ志向であろう。この点については、人民革命政府の政策作成に中心を成したとみられる第三党の見解をみると一層明らかになる。

すなわち、第三党の綱領的文書ともいべき「我們的政治主張」(16)によれば、中国の社会は封建勢力と帝国主義勢力の支配する前資本主義段階にあって、経済の主体は農業と手工業であり、直ちに社会主義革命を行う条件はまだ備わっていない。しかし、生産技術の発達した現代において、また中国のブルジョアジーに力がなく、労働大衆の力が急速に増強するであろうという条件の下では、欧米のブルジョア革命＝個人資本主義の形成という途をとることは出来ない。採用すべきは、前資本主義から社会主義への過渡期としての国家資本主義である、という(17)。換言すれば、国家権力の介在によるブルジョア革命の遂行ということであろうか。

また、農業と手工業生産が中国経済の現段階において



主体であるとする観点から、人民の解放は農民中心に考えられていて、プロレタリアートについては殆ど軽視されている。これはまた、「共産党は農民を利用し農民を威嚇し、一部分の労働者の独裁政権を建立しようとしか考えていないが、吾々は……労農の利益を平行的に発展せしめ」(18)るものだとする思想から生まれた姿勢でもある。第三党の「政治主張」は、直接労働者に関する施策については社会政策の項目で簡単に取扱っている(19)にすぎない。農民に関しても、地主と小作農の対立を基本に捉えていることは伺えても、農民の各階層について厳密な分析はみられず、いずれの階層を敵に、あるいは味方にするのか明確ではない。

だが、ともかくも帝国主義の中国侵略とこれに対する国民政府の売国的政策を指弾し、中国社会の半封建性を克服する途を、ブルジョア民主主義の枠内であるにせよ人民大衆の政治参加に求めて、国民政府の反動政策に反対する方針をうち出したことは、十分注目に値するものであった。問題はその実行にかかっていた。

では、人民革命政府は以上の主張をどのように、どこまで実行に移したであろうか。内政面と外政面に分けてみてみよう。

内政面では、人民革命政府はまず政府の機構を整えるべく、各部・委員会の組織大綱(20)を決定した。続いて、生産人民が主権をもつ「民主共和国」の基本原則に沿って、「生産人民政権歩驟辦法」を制定した(21)。この辦法によれば、人民が選出して樹立する政府は、以下のような手続きを経て誕生することとなる。すなわち、①中央から正副の省長・県長を派遣して臨時に省政・県政を担当させる。②県政府が各区郷に革命分子を特派員として派遣し、特派員は戸口・耕地の調査、自衛・宣伝の措置を行って、民衆を組織する。以上の措置が完了して後に、全郷の生産人民大会を開いて郷の人民政府委員を選出し、特派員は引きあげる。③郷の人民政府が強固になった段階で、同様の方法により区の委員を選出する。④同じく県の委員を選出して、これに県政を移譲する、というものであった。

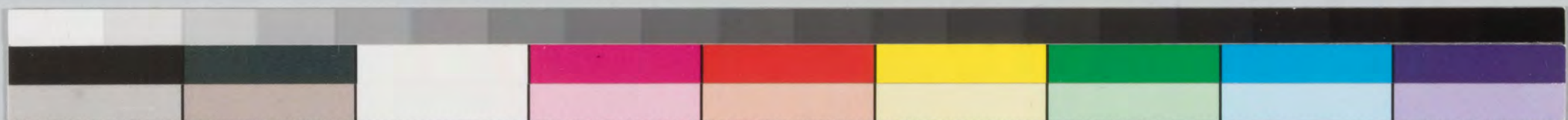
これは、既に1年前から閩西善後委員会(22)が福建省西部の旧ソヴィエト区に施行していた制度を全国、全省に拡大したものとみられる。同地域では、善後委員会が特派員を派遣して戸口調査を行い、保衛手段の措置を取り、流浪民の救済を訴えて民衆を惹きつけ、これに計口授田規則（後述）を実施していた(23)。この地域で未だ人民による選挙が行われていない点からみて、上記の辦法が施行されても全省規模での選挙までには相当の期間を要すると思われる。その間に特派員があらゆる予備工

作を行うことが出来る。従ってその人選が最も問題であり、しかも中央の人民革命政府の姿勢如何によっては、この辦法は極めて形式的なものに終る可能性をもっていた。事実、12月20日に開かれた各地の商会代表者の会議では、特派員の人選を慎重に行うようにとの要望が出されたのである(24)。後述する如く、人民革命政府がブルジョアジーに低姿勢をとる時、労働者・農民を基盤にする生産人民政権は殆ど有名無実化するであろう。

そこで注視されねばならないのが労働者・農民に対する姿勢である。人民革命政府の基本的姿勢を示すと思われるものに民衆訓練処がある。これは文化委員会の中に設けられて、「民衆の運動と訓練を管理」(25)する機関である。ここには、労働運動や農民運動などの大衆運動を上から指導し、その官製化を図る考えが明瞭である。文化委員会自体が民衆に対する宣伝・教育を担当する機関であるから、生産人民政権を宣言する人民革命政府においてこの機関の占める位置は重要である。委員長の陳銘枢はこの点を考えてか、文化委員会の各機関の要所にすべて自分の部下を配置していた。その一例が民衆訓練処の責任者の梅翼彬で、彼は、労働者を組織して資本家や日本に対抗するつもりはないと語っていたのである(26)。人民革命政府の中では最も明確な綱領をもち、反蔣の組織活動を行ってきた第三党は、政府内の左翼として注目されたが、同党の主張が人民権利宣言と異なることなく単独組織として存在する必要はなくなったとして解散してしまった(27)。第三党の活動は特に福建省で最も大きな力をもっていたから、それが独自の活動を行わなくなった点は大衆運動の発展に一つのマイナスであった。その上、中国共産党は依然として非合法の存在であった。人民革命政府は12月1日に大赦令を出して政治犯を釈放したが、これは単純な反蔣派について適用されただけで、共産党員はその「過激な思想」を棄てなければ対象にはならなかった(28)。

このように大衆の自発的な動きを抑えようとした人民革命政府は、同時に労働者や農民の解放に関する施策についても全く不十分であった。まず労働者に対する具体的な措置は何もとらなかった。これは、かれらの思想に既に明瞭であった点の表われである。農民に対しては、基本的スローガンの計口授田がある。これは閩西のものを全省に適用する方針であった。閩西では、「計口授田暫行法」「授田細則」「授田技術」「授田規律」の四つの関係法令が制定されていた(29)。その基本点は、一切の土地所有権は国家にあって耕作農民は使用権および収益権をもつこと、過去の階層の如何を問わず一律平等にこれらの權益を授与することであった。だが、例えば、当省出身の公務員（官吏、教師、士兵、団丁）や外地で

中 101
汀 110
青 117
珊 124
立 127
昌 131
兵 135
上海文
9164]
等 3
劍 11
等 21
苑 37
鳴 39
等 42
昌 45
時 48
波 50
生 51
等 52
貴 53
祥 57
平 60
年 63
大 65
槐 67
権 71
臣 74
道 76
溪 78



商工業に徒事する者も土地の分配を受けること、これを家族が自作するかあるいは余力のある農民が兼耕できること、また余力ある農民は土地を受領して開墾することができること、などの規定は、結局は地主や富農に有利に作用することは想像に難くない。また、外地にいる商工業者にも土地を分配するのは、華僑からの送金が福建省の経済に重要な意味をもっている点を考えての事と思われる。耕作農民の土地使用権と収益権を彼等の闘争の中から確立することこそ、農民解放への途を開くものとなるであろうが、計口授田が特派員によって行われ、その特派員は大衆の自発的決起を望まない人民革命政府の意を体しているのであるから、計口授田が従来の中国農村の基本的矛盾にどれだけ切り込むか、甚だ疑問である。中国共産党が、閩西の土地政綱は地主と富農の利益を代表するものと批判した⁽³⁰⁾のも、理由のないことではない。また、閩西の計口授田は施行から1年を経過してなお完了していなかった⁽³¹⁾。未了の地域では、小作料の引下げ（二五減租）が行われていたが、これは国民政府が初期に実施していたものであった⁽³²⁾。従って、全省の規模で、しかも国民政府の攻撃と闘いながら、計口授田を実行するのは非常に困難であったろう。

農民政策としてもう一点、民衆訓練処の発表した「農民解放会要綱」⁽³³⁾がある。本要綱によれば、解放会は各郷に置かれ、農村経済の発展と農民の解放を主旨とし、土豪劣紳の打倒、一切の封建勢力の肅清、小作農の永久耕作権の実現などを任務にするという。これは諸宣言の原則に沿ったものであり、上記のほか、都市の大衆と共に革命行動に参加することや農民の武装を任務としている点は、大衆運動としての農民の組織である性格をもっている。しかし、既に実施されている閩西の施政原則が、労働者・農民の武装について組織・編制方法を定めている⁽³⁴⁾が、その実体は、数千の民団や匪賊の十九路軍編入であった⁽³⁵⁾。また、農産価格の引き上げ、生産技術の向上といった任務は政府の施策に関係するところであって、一種の御用組合的存在である面を示している。会費の額を雇農、小作農、自作農など階層別に定めている点は、これら諸階層の固定化を認めることであり、計口授田の容易に行われ難いところを示しているとも云える。解放会の活動と計口授田の関係については不明であるが、おそらく政府の施策には直接タッチしない大衆組織としてのみ解放会は存在するのである。とすれば、その要綱を政府機関が天下り式に示したところに、民衆訓練処の性格の具体化をみる事が出来る。

一方、人民革命政府はブルジョアジーに対しては相当苦心したようである。何回か商会代表者との懇談会をもって慰撫に努め、12月4日には「保護工商業資本令」の

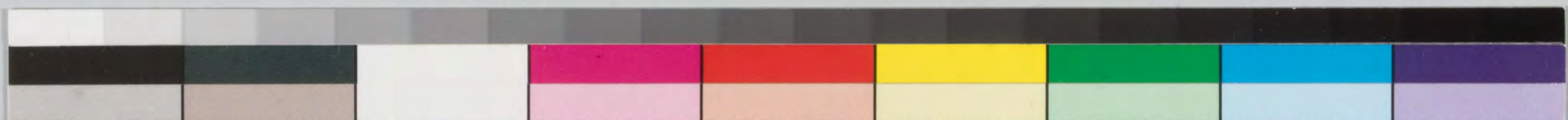
布告⁽³⁶⁾を出した。さらに18日には、陳友仁が談話を発表して、公用事業以外に個人企業の国有化の意志はないことを明らかにした⁽³⁷⁾。これらは、人民権利宣言の「発展族資本、奨励工業建設」という基本方針に沿ったものではあるが、労働者・農民大衆に対する態度と比較する時、人民革命政府のブルジョアジー重視の姿勢は濃厚である。このことは、福建省の経済事情をみると十分に理由をもっていることがわかる。福建省は多数の華僑を出している点からも伺える如く、山地が多く農村は貧しかった。商港として栄えた福州・廈門の内外貿易も輸入超過の状態、その上世界恐慌の影響を受けて貿易高も華僑からの送金も激減していた⁽³⁸⁾。そのため福建省の財政は従来から逼迫しており、十九路軍は省財政だけで維持することが出来ず、中央の国民政府と広東省から毎月援助をうけていた⁽³⁹⁾。従って、人民大衆に依拠する意志を一切もたなければ、人民革命政府はひたすら実業界に援助を求めなければならなかったであろう。元来弱体であった福建省の経済は、金融界の動揺、米価の騰貴といった事態に及んでいた⁽⁴⁰⁾。人民革命政府は商会に借款を申し入れ⁽⁴¹⁾、米商に香港から外米を購入してもらうように依頼したが、かれらは税金の停止を要求する始末であった⁽⁴²⁾。

かくて、人民革命政府が実際に着手した経済政策は、人民の奢侈を戒める節約運動、交際宴会費の規制、公務員の給料の制限といった全く末梢的なものにすぎなかった⁽⁴³⁾。結局、同政府には一般大衆の解放を根本方針とする確たる経済政策はなかったのである。逆に、財政的基盤の弱い政府は実業界に依存する途だけを考えることによって、宣言にある改良主義的な政策すら実行に移し得ず、退歩を余儀なくされたであろう。

次に対外関係はどうであったか。

一言でいえば、人民革命政府は、諸宣言の基本路線に反して反帝・反日の行動は一切とらなかった。逆に諸外国の干渉を非常に恐れ、民意による取消し要求があるまでは治外法権を保護し、友好国には特別の態度でのぞむと、外交部長の陳友仁は語った⁽⁴⁴⁾。実際、福州と廈門に諸外国は居留地をもち、銀行、商社、学校や病院などの文化施設もあった⁽⁴⁵⁾が、人民革命政府はこれに一切手をつけていない。また、この面で大衆運動も殆ど存在せず、民衆訓練処にこれを組織する意志はなかった。この点について同処は、全ての問題の解決は蒋介石打倒の後であるといっている⁽⁴⁶⁾、蒋介石打倒の最優先性を口実にしていた。その背後には、陳銘枢が予め日本の了解をとりつけていたという事情があった⁽⁴⁷⁾。

この平穏な事態に対応してか、関係諸外国もまた福建沿岸に2、3隻の軍艦を派して威嚇を示すほかには公然



たる介入に出ず、権益と居留民が保護されている限り干渉の意志がないと声明するに止まっていた。人民革命政府が財政上の必要から福州税関の引渡しを要求した⁽⁴⁸⁾時にも、福州の日・英・米・仏領事団は条約上の違反でなければ干渉しないことを決定した⁽⁴⁹⁾。しかし、これについては人民革命政府の方で弱気を出し、外国の干渉を避けるためと称して、結局は外国からの税収を国民政府へ送付することにしたのであった⁽⁵⁰⁾。

日本もまた、事変勃発直後に外務省が内政不干渉の方針を発表、但し日本の権益と日本人の生命財産は十分に保護すると声明した⁽⁵¹⁾。その後も福州の領事団の決定に加わり、また、今事変の背後に日本が関係しているとの噂があったのに対して、国民政府に無関係を申入れていた⁽⁵²⁾。この態度は、この年の9月に新たに外相に就任した広田弘毅が日中関係の正常化を目指したこと⁽⁵³⁾、そして外務省と離れて単独行動に出がちであった軍部の目が華北に注がれていたことによるのではないだろうか。また、欧米諸国との関係については、特に福建省では日米の角逐が激しかった⁽⁵⁴⁾が、広田外交はアメリカに対して親善を図ることを宣言し、その必要にも迫られていた⁽⁵⁵⁾ことが考えられねばならない。従って、福建省においてこの時点で日本は国際関係上、軍事上、進んで事態を悪化させる要件をもたなかったのではないだろうか。

しかし、日本は単純に不干渉政策に止まっていたのではない。排日行為が台湾に波及するのを非常に恐れていたから、陳銘枢の態度は甚だ好都合であったのである。日本政府はこれを機会に、公然たる福建侵略に出ることはできなかったが、内心は日本の台湾統治の安全を図り、かつ福建を完全に掌中に収めることを望んでいたのではないかと。特に台湾総督府の関係者はその機会をつくろうと意図していたとも考えられる⁽⁵⁶⁾。

かくして、人民革命政府は対外面においても何ら為すところなく、逆に諸外国の意を迎えるかの如き態度をとって、基本方針を踏みにじったのである。内外政両面で当初掲げた主張を実現して大衆の支持を獲得し、その力で国民政府と対決する途を選ばなかった。また、中華ソヴィエト政府との協定を否定し⁽⁵⁷⁾、紅軍の派遣などの要請を出すこともなく、西南派との提携にのみ熱心であった⁽⁵⁸⁾。これらのことは、結局、福建事変が実態においては従来の軍閥抗争、国民党内の覇権争いの域を出なかったことを示している。同時に、人民革命政府の指導者たちの意識もこの程度を超えるものではなかったといえる。従って、かれらは紅軍との停戦協定以上に両者の関係を発展させる展望をもってはいなかったのである。その可能性を作り出すとすれば、それは専ら中国共産党

側の対応の仕方にかかっていた。だが、共産党側の積極的支援もなく、西南派の支持も得られず⁽⁵⁹⁾、ついに十九路軍の武力だけで国民政府の討伐軍と相対することになった。蒋介石は剿匪軍の一部を割いて福建に向け、12月24日頃より攻撃は激化した。十九路軍は一部で強力な抵抗を示したが、1934年1月13日福州から撤退を余儀なくされ、ここに事実上人民革命政府は解消した。

4

以上の如き経過を辿った人民革命政府に対して、共産党側は如何なる態度をとったか。

まず、初歩協定の直接の締結者である中華ソヴィエト政府は、2回にわたって電報を送り協定の履行を迫った。第一電は、人民革命政府成立1ヶ月後の12月20日に出された⁽⁶⁰⁾。これは、福建側に何ら積極的な反日反蔣行動が見られないと、その怠慢を厳しく責めるとともに、直ちに民衆に民主的権利を与え、民衆を武装して反日反蔣闘争を展開するように要求している。つぎに、事実上人民革命政府が壊滅した翌年1月13日に出された第二電⁽⁶¹⁾は、緊急提議として一層具体的な要求、というよりも指示を行っている。それは、民主的権利の保障を第1項に掲げているが、福州・泉漳などの武装民衆による保衛とか、隊伍中の投降者の粛清とかいった、福建が危殆に瀕している状況に応じての細かな指示であった。

一方、中国共産党中央委員会はこれら2通の電報とはかなり異なった調子の宣言を発した⁽⁶²⁾。それは人民革命政府の反革命性の暴露に終始一貫していた。すなわち、人民革命政府が人民に与えるという民主的権利は、臨時戒厳令を宣布してこれを取消し、「計口授田」は実際にはただ農民が地主階級の一切の土地を没収するため立上って闘争しないように「するためであり、「人民義勇軍は実際は地主の武装(民団)の改名にすぎない」。すでに「この政府が人民的でもなく、革命的でもないことが事実において証明された」。「その一切の行動はまさに、過去における反革命的国民党領袖、政客が新方法を利用して民衆を欺瞞した芝居にすぎない」と述べていた。そして最後に、直接福建の民衆に呼びかけて、自ら立上って労働組合や農民協会を組織し、政府にかれらの武装を要求するようにと訴えた。また、事変終熄後の1月26日に出した第二次宣言⁽⁶³⁾でも、第一次宣言と同じ調子で、「福建人民革命政府の歴史は、まさに反革命的改良主義の歴史であり、氣力を空費して第三の途を求めた者の歴史であ」って、中国の前途には植民地主義の国民党の途か、反帝民族解放のソヴィエトの道路かの二つがあるのみ、と述べ、第一次宣言の正しさが証明されたと総括してい

炬 1
明 6
等編 10
五年全年
[9312]
徒杰 3
鏘等 20
式娟 31
与 37
寛 43
国銓 61
培恒 71
与 85
吾 90
才宝 99
応熙 105
思鼎 113
慶祥 3
云初 17
中杰 23
長 烟 33
工文軍 49
秀山 64
高云 79
97
史 丁 103
郭志臣 107



る。

このように、中華ソヴィエト政府と中国共産党中央の対福建態度は明らかに異なったものである。すなわち、前者に人民革命政府の存続を望む姿勢、その存在意義を認める姿勢がみられるのに対して、後者は殆ど当初より（第一次宣言は12月5日に出された）否定的態度をとったということである。これは何を物語るものであろうか。

周知の如く、当時党中央を支配していた博古(秦邦憲)らと毛沢東の間には対立があり、毛沢東は事実上指導的地位からはずされていたといわれる(64)。従って、初歩協定の締結も当然党中央の承認するところであったろうが、その初歩協定に基づいて合作を如何に進めるかについての見解の相違が、ここに表われているのではないか。この時期の毛沢東の見解は不明な点が多く、中華ソヴィエト政府主席の名で発表された文書も、彼自身の意見がどこまで表明されているか疑問である(65)。だが、張国燾は回憶録の中で、福建事変の際に毛沢東が自身の見解を提出した、という話を伝えている(66)。そして、上記の電報と宣言にみられる相違や、「中華ソヴィエト政府と中国共産党中央委員会がいかなる共同声明も出さなかった」(67)事実から考えて、やはり両者の間には対立があったといえる。ただ、毛沢東の発言が党中央の方針を左右するような力をもっていたとまでは考えられない(68)。それ故、12月20日の第一電がもつばら福建側のみ要求をつきつけ、自らの行動については共同行動の準備があると述べるだけで、まず相手の出方を見届けるという態度について、そこに福建側に対する不信だけを見て、この時期の党中央に支配的な中間勢力不信論と異なるところがないと単純に解釈することはできない。なぜなら、初歩協定そのものが福建側のみ責務を負わせる性格をもっており、その第9項は福建側が諸条項を遂行したのちに具体的作戦協定を定めるとしていた点からすれば、毛沢東はこの協定に忠実であったといえる。あるいは、協定締結者の一方を代表する中華ソヴィエト政府主席として、毛沢東の態度は一貫性をもっていたともいえる。この枠の中で、協定の実行を迫り、危機を警告する電報を送ることだけが、毛沢東にできる権限内の行動だったのではないだろうか。勿論、この時点で毛沢東がどれ程の統一戦線思想をもっていたかは疑問であるが、仮に福建側に不信感を抱いたとしても、同時に提携可能な存在としての人民革命政府を認めていたことを、2通の電報は物語っている。

ところが、事変後の2月11日に発せられた中華ソヴィエト政府の宣言(69)は、中国共産党中央と同じ見解に立っている。すなわち、福建側の申し入れによって初歩協定が締結され、人民革命政府は協定に基づく政策を発表

したが、それは机上の空論に終わった。中華ソヴィエト政府の警告にも拘らず、国民党軍の進攻に対して具体的な軍事的措置もとらなかった。ここに事実を以て、ソヴィエト政府と紅軍だけが、中国を国民党と帝国主義から解放することができることを証明された、と。これ以前、すでに1月末の第2次全国ソヴィエト代表大会における報告の中で、毛沢東は福建事変に言及して、人民革命政府と国民政府の間にはいかなる相違も認めることができない、と述べていた(70)。これは明らかに、大会直前に開かれた中国共産党5中全会の決定に従った報告であることを示している(71)。後に「毛沢東選集」に収録されたのは、本報告中の「ソヴィエトの経済政策」の項と結語だけである。結語はとくに削除部分が多いが、福建事変に関する部分も例外ではない(72)。これらの事実、福建事変後における中国共産党中央と毛沢東の見解の一致が、毛沢東によって意識的に図られたものであり、彼の本意ではなかったことを示している。彼は、人民革命政府の崩壊によって当面統一戦線の可能性が消失した状況下でなお、敢えて党中央に対立する意志をもたなかったのではないだろうか(73)。人民革命政府の空論は、党中央の見解の固執に役立ち、それだけ毛沢東の立場を困難にしたであろうから。

かくて、福建事変に対しては中国共産党中央の中間勢力敵視政策が貫かれた。この期間に出された中国共産党機関誌『紅旗週報』の社論(74)は、福建事変に関する党の任務は十九路軍と福建政権の欺瞞の暴露と大衆の動員であると述べ、党細胞内の討議用資料(75)も、同様の観点から福建事変を取扱っている。そして、これらの文書は初歩協定には一切触れていない。党内に協定締結に疑問を抱く者があった(76)事実を考えるならば、単に欺瞞の暴露だけで、どうして人民革命政府に対する有効な行動が組織できるだろうか。龔楚によれば、党中央の博古らは紅軍の即時福建派遣を主張した(77)そうであるが、その意図は、紅軍の行動によって人民革命政府との統一戦線を強化するのではなく、結果的にはその破壊に導く方向にあった(78)と考えられる。何故なら、党中央は協定を「利用して党組織を拡大する」(79)こと、および十九路軍士兵を獲得する(80)ことを目標にしていたのだから。

では、福建事変に表わされた中国共産党の政策の基本的戦略戦術はいかなるものであったか。とくに統一戦線に関してみてみよう。

いうまでもなく、この時期の中国共産党の戦略はソヴィエト革命であるが、九・一八事変以来反帝・反日闘争において労働者・農民・一般勤労大衆の発動による民族革命戦争の戦術をとり、1933年に入って、その組織方針



李露野 66
張天翼 67
沙汀 69
焦菊隱 71
田間 73
陳望道 74
侯外廬 75
沈志遠 79
陳沂 81
柯仲平 88
丁玲 89
魏金枝 92
盧于道 96
冰心 98
李少春 100
陶孟和 101
柯璜 103
許德珩 104

王統照 107
馮乃超 108
巴金 111
周鋼鳴 116
康濯 120
馬加 123
馬烽 127
拉沁夫 129
高玉宝 130
吳雪 132

鄒明 135
艾文会 140
金仲華 142
靳以 144
曹禺 147

程硯秋 151
朱学範 153

周明鎮 155
鄭律成 156
金蘿 158
陳垣 161
袁翰青 163
馬哲民 164
黃琪翔 165

として下層統一戦線政策を採用した⁽⁸¹⁾。これは二方面から実行に移された。一つは、他の武装勢力との共同行動であり、他の一つは、労働者・農民・革命的學生・小商人などを対象とする大衆運動面における反帝統一戦線である。

前者はまず、中華ソヴィエト政府の、三つの条件に基づいていかなる武装部隊とも共同の抗日武装闘争を行う用意がある、という宣言となつてあらわれた。この政策は、直接日本の支配下にあり、さまざまな遊撃隊がそれぞれ抗日闘争を行っている満州において最も切実に必要とされていた。1933年1月26日、党中央は満州の党組織と党員に書簡を送り⁽⁸²⁾、その中で満州に存在する各種抗日軍の分析を行い、統一戦線の基本原則⁽⁸³⁾を提示した。これに基づいて各種抗日軍隊との提携はある程度の進展をみた。しかし、翌年2月に出示された党中央の書簡は、一定の条件下で民族ブルジョアジーと統一戦線を組んでも同時にプロレタリアートの指導権獲得のために彼らと闘うものであって、満州省委員会はこの点で誤りを犯したと述べている⁽⁸⁴⁾。つまり、この書簡はあくまで下層統一戦線に固執することによって、他の武装勢力との共同行動が当然に内包する上層統一戦線を事実上否定してしまったのである。こうして、満州では広範な抗日民族統一戦線を必要とする情勢がとくに切迫していたにも拘らず、1934年秋まで上層統一戦線の展開はなかつたのである⁽⁸⁵⁾。

一方、中国本土においては、三条件の提案によって国民党軍の一部領袖との提携へと直接働きかけるといふよりも、かれらの下部兵士に与える影響を重視した。博古は、この提案が、「紅軍は後方を攪乱している」という国民党のデマをあげき、対日妥協策をとる国民党首脳部に対する下部党員の不満をひき起し、困窮に従事させられている部隊の士気を低下させ、中下級士官も北上抗日を要求した点に、意義を認めていた⁽⁸⁶⁾。すなわち、中国共産党が具体的に抗日を考えていることを一般大衆や国民党軍兵士に伝え、かれらの決起を促すことこそが三条件提案の真意であつた、といえる。中国共産党中央が望んでいたのは、一般兵士の圧力によって上層部が抗日の共同行動に踏みきることであり、それによってこそ、かれらのイニシアティブの獲得は容易であるだろうから。福建事変の際には、上層部との提携が先行したが、共産党の示した人民革命政府に対する不信は、初步協定が、国民党地区の大衆と軍閥下の兵士を獲得するための突破口と見做されていたことを示すものであろう。

このように、三条件の提案はその文面の指し示す方向は上層統一戦線であつたにもかかわらず、共産党中央の現実の政策はそれを下層統一戦線促進のための一宣伝材

料にしたにすぎなかつた。では、大衆運動の中ではどのように進められたか。

1933年6月、塘沽協定締結などの情勢から、満州への指示信が全党に公表され、全国の党組織がそこに示された戦術を応用するように、との党中央の意向が付言されていた⁽⁸⁷⁾。同時に、改めて全党に反帝運動における統一戦線に関して具体的方針が示された⁽⁸⁸⁾。それは、「反帝運動に真正の統一戦線をうちたてることこそが、広範な大衆を革命闘争に組織する基本策略である」と規定し、反帝統一戦線の行動綱領および目前の行動を提出した。行動綱領は、労働組合や救国会等の大衆組織を利用して統一戦線を作り出すための共同綱領として示されていた。すなわち、国民党の投降裏切りに打撃を与えること、民衆に反日戦争参加を呼びかけ、かれらの日貨排斥を積極的に援助すること、兵器庫および輸入されてくる武器で民衆を武装すること、すべての海陸空軍を対日作戦に動員し、直ちにソヴィエト区攻撃と軍閥戦争を中止すること、などであつた。目前の行動については、工場・学校・農村・兵營における大衆集会、デモ、抗日義勇軍や宣伝隊の組織化、全国的反帝組織の創設など、一層具体的な活動方法を指示していた。

だが、李立三ライン以後国民党地区の党勢力は弱体で、その指導下に多数の大衆を組織し得ていない状況では、下層統一戦線の発展すら容易ではなかつた。この点は、上記の書簡でも統一戦線を確立できずにいる原因として指摘していた。すなわち、企業内で労働者大衆の闘争を発動・指導して革命的な労働者組織を発展させる十分な工作が行われず、工場が統一戦線樹立の基本陣地であることが確実に理解されていないこと、あらゆる大衆運動の中に深く入りこんでいないこと、党の公然・半公然の活動が大規模な大衆闘争の展開に不可欠であるのに、その可能性を追求していないことなどをあげている。王明（陳紹禹）もまた、これより半年後のコミンテルン執行委員会第13回総会において、赤色労働組合の活動と組織の弱さ、黄色労働組合および国民党系労働組合内での活動の不十分さ、インテリの大衆活動の意義の過小評価などを指摘し、主体的条件が客観情勢から立ち遅れていると述べていた⁽⁸⁹⁾。統一戦線政策が提起されて半年経つてもなお、中国共産党の活動の弱さと問題点は変らなかつたのである。福建事変の際にも状況は同じであつた。党中央は、赤色労働組合も黄色労働組合もその他すべての無組織労働者も「反帝・反国民党・反対資本進攻」のスローガンの下に糾合せよ、との指示を出した。人民革命政府文化委員会は、労働者が組合を組織することを許可し、それを政府に登録させる方針をとつた。これは、大衆の中で公然と統一的労働組合を組織するチャンスを与



えるものであったが、福建の党組織はこの機会を看過し、「清廉高潔」な態度を堅持して少数の赤色労働組合に満足していたのである(90)。そのため、人民革命政府に政策の実行を迫る大衆運動も展開されなかったといえる。

この時期の反帝運動として国際反戦会議(91)に向けての準備活動がある。宋慶齡らを中心に国民禦侮自救会が組織され、蒋介石に対する失地回復の要求、東北義勇軍への援助などをスローガンに活動を始めたが、2ヶ月足らずで国民政府に解散させられた。しかし、その後も存続した準備委員会によって代表団歓迎と中国代表選出の活動が進められた。中国共産党はこれを広範な大衆運動として展開すべく工作を行った。この運動は、大衆運動の戦線統一に一步を進めたとして評価されたが、同時にやはり大衆工作の弱さ、黄色労働組合や国民党軍の士兵、農村からの代表が殆どなかったこと、公然活動の不十分さ等も指摘されたのである(92)。

このように、抗日運動においても下層統一戦線だけが追求されたのは、国民党および国民政府を抗日闘争の阻止要因として中国民族の内外面における主要敵と捉えていたからである。他の武装勢力との共同闘争のために提案された三つの条件自体が蒋介石の施政の否定であり、抗日闘争は国民政府の対日政策との対決であった。即ち階級闘争と民族闘争が併行して存在したが、前者が固定的に考えられていたために、民族的矛盾が強まりつつある状況下に両者を有機的に結合させて統一的に闘争を展開させることが出来なかったのである。いわゆる中間派も国民党と同じ範疇の敵として捉え、動揺分子を柔軟な姿勢で抗日陣営に引入れる戦術をとらなかったことが戦線の拡大を不可能にしていた。この点に関して、王明の批判は最も早く、具体的な主観的・客観的条件の考慮なしに党の任務を図式的・機械的・固定的に理解・遂行し、新しい条件の下に新しい方法で活動する能力がない、この問題で党全体が決定的な転換を行わねばならぬ、と1933年末には述べていた(93)。だが、新しい条件について彼は十分な説明をしていなかった。

1934年4月、中国共産党は初めて具体的な綱領を以て直接全国民衆に反帝統一戦線への結集を呼びかけた(94)。そこに掲げられた7項目は、前年6月に反帝統一戦線の行動綱領として中央が全党に示したものと殆ど同じであった。ただ今回は、前年の党員の行動指針的性格から全人民のものとして公表されたのである。しかも、それは、「心から帝国主義に反対し、亡国奴となることに甘んじない全ての中国人は、政治傾向によらず、職業や性別によらず、連合して立ち上がれ！」と訴えて、従来より広範な諸階層の参加する抗日闘争への展望を開いた。これに基づいて作成された中国民族武装自衛委員会の「対日

作戦基本綱領」(95)は、宋慶齡以下千七百余人の署名を得て発表され、その後も署名者の数は増えていった。その中には胡漢民、翁照垣らの名も見え、基本路線は下層統一戦線であり、国民党全体との統一戦線は全く示されていないが、少なくとも「下から上への統一戦線」(96)が初めて現実となったのである。これ迄は、例えば満州への指示信の中で上層統一戦線に触れてはいても実際行動では否定され、中国本土においては事実上全く下層だけの統一戦線であって、上層への展望はなかったに等しい。

ところで、今回もまたこの「綱領を民衆中に通俗化し、具体化することが十分に行われなかった」(97)との批判があるように、中国共産党の大衆工作はなお大規模な闘争を展開するだけの力をもたなかった。だが、国民政府の弾圧と共産党のセクト主義が活動領域を狭めてしまっている時、単に大衆工作の弱点を指摘するだけでは不十分であった。戦線の拡大を図るには、日本の侵略によって生じた各階級内部および各階級間の関係の変化を分析し、それに基づいて流動的な状況に対処できる思考力が必要だったと思われる。

しかし、1935年1月の遵義会議でもこの点に新しい転換はみられない。これ迄の政治路線は全て正しかったとしている点から、下層統一戦線戦術にも変化はないと考えられる。福建事変についても、紅軍の行動は「十九路軍軍閥のペテンをいっそうたやすく暴露し、共同の反日反蔣の戦争のなかで労働者農民兵士大衆をわれわれの側にひき入れる」(98)のために必要であった、と述べているのである。

一方、コミンテルンでは、ヨーロッパにおける反ファシズム闘争の新しい局面を反映して、内部に多くの抵抗を伴いながらも社会民主主義に対する戦術の変更とより広範な統一戦線への転換の問題について討論が進行していた(99)。この空気を吸収してか、モスクワに在った王明は、1935年初には福建事変について、紅軍指導部の誤りが「十九路軍の敗北を早めるのに重要な役割を果たした」と述べ、その誤りの原因は党が敵軍内の工作とその矛盾の利用に当って考慮に入れなければならない新しい要因を全く理解していなかったことにある、と批判している。そして、民族革命戦争には「工農紅軍や革命的労働者ばかりでなく、……各種の政治的、軍事的グループも加わるだろう」(100)として、八・一宣言(101)につながる観点が見出されるのである。だが、王明のコミンテルン7回大会での報告や八・一宣言は、日本の進攻によって生じた中国社会の変化を階級的視点で分析するに不十分であった。

中国共産党内部で上層をも含む統一戦線の戦略が確立されたのは、1935年12月に瓦窯堡で開かれた中央政治局



会議においてであった。この会議の決議は、下層と上層の最も広汎な民族統一戦線のみが日本帝国主義と蒋介石にうち勝ち得るのであり、そのためにはセクト主義を克服し、下層大衆の工作方法のみでなく、上層との交渉方法も知らねばならない、として従来の政治路線の批判を行った。特に毛沢東はその報告のなかで、階級関係の変化を分析し、民族ブルジョアジーとの統一戦線の問題に理論的な基礎づけを行ったのである。ここで初めて、福建事変についても、蔡廷鍇たちが「もともと赤軍にむけていた銃口を日本帝国主義と蒋介石にむけかえたことは、革命にとって有利な行為」(102)であったという見方が生まれたのである。これは福建事変を単に一般大衆や兵士への影響拡大の問題として捉えるのではなく、人民革命政府自体に一定の肯定的評価を与えるものであった。

以上、福建事変の経過と中国共産党の対応の仕方を見てきた。人民革命政府が掲げたスローガンだけをみる時、それは十分に共産党が提携し得る内容であったが、実態を検討すれば、単純に提携を奨揚できないものがあつた。しかし、日本の進攻と蒋介石の統治に対する不満から発生した事変であったことを考えると、共産党側の積極的な支援行動によって、一般大衆や下部兵士だけでなく少くとも指導者の一部は共同行動に引込むことが出来たのではないか。その意味で共産党の傍観は陳銘枢らを喜ばせ、かれらの活躍を容易にしたのではなからうか。ただ、いずれにしても下層統一戦線に固執していた共産党の戦術では、実りある共同行動の展開は不可能であったと思われる。従って、福建事変に対する共産党の態度は、三条件による共同の武装行動の呼びかけの真意が奈辺にあったかを、またその限界を事実を以て示したものと見える。そして、下層統一戦線はその対象を階級闘争の担い手と同じ階級的範疇にのみ求めたが故に、抗日民族統一戦線としての広がりを実際準備しなかったのである。

注

(1) 「毛沢東選集」3巻下（日本共産党中央委員会出版部、1965）、237頁。

(2) 例えば、

何幹之主編「中国現代革命史」上（北京、高等教育出版社、1957）、164～65、170頁。

胡華主編「中国革命史講義」（北京、中国人民大学出版社、1959）、283頁。

岩村三千夫「現代中国の歴史」2（徳間書店、1966）、95頁。

(3) 石川忠雄「福建人民革命政府事件と中国共産党」

（『法学研究』33巻2号、昭和35）

Dorrill, William F.: The Fukien rebellion and the CCP—a case of Maoist revisionism. (“The China quarterly”, no. 37, 1969).

(4) 全文は、『紅色中華』149期、1934年2月14日。

(5) 1933年1月17日、「中華蘇維埃臨時中央政府・工農紅軍革命軍事委員会宣言」（『紅色中華』48期、1933年1月28日）

なお、陳誠コレクションに蒐集されているビラ、および『救国時報』123・124合刊、民国26年9月18日では、発出日が1月10日になっている。

(6) 福建側から発表されたものはない。

中華ソヴィエト政府側は、人民革命政府崩壊から1ヶ月後、『紅色中華』149期に、「中華蘇維埃共和国中央委員会決定」として、後述する同政府の2通の電報と共に全文を発表した。

また一般には、共産党の長征出発後ソヴィエト区に入った国民政府軍が発見した文書によって、知られるところとなった。『国聞週報』12巻9期、民国24年3月11日所載の聖倫「福州与瑞金——閩変中『人民政府』与『蘇維埃政府』合作経過之史料」は、それらの文書を収集・整理したものである。

(7) 双方の軍事行動は11月中旬に中止された（波多野乾一「資料集成中国共産党史」3巻〔時事通信社、昭和36〕、52頁）。

(8) この間の経緯については、

「蔡廷鍇自伝」上（自由旬刊社、民国35）、378～80頁

劉治平編著「反蔣運動史」（中国青年軍人社、民国23）、658～59頁

台湾総督府警務局保安課「福建事変概説」（昭和10）、20～23頁

を参照。

(9) 参加者は、各省代表100余人、軍隊・商工団体・民衆団体など約3万人。但し各省代表者は殆ど福州在住の各省出身者であった（台湾総督府、前掲書29頁）。また一般民衆の参加については、大会通電は10万余人というが、いずれにしても、商店・工場・学校などは半日休暇にして全員参加せよという福州公安局の布告（翊生「閩遊回想録」10、『香港工商日報』1934年1月29日）によるものと思われる。

(10) 劉治平、前掲書662頁。

(11) 事件に参加した政治グループとその中心人物は次のとおりである。

広西派：李濟琛

十九路軍系：陳銘枢、蔣光鼐、蔡廷鍇、載戟ら

慶鈞 67
景超 86
浦成 106
若水 123
宇人 138
白崑 148
紫翔 156
英 169
女壁 187
思源 198
炳然 210
放 218

編輯部編
〔630〕

1
葉眠 1
葉眠 19
其芳 35
冠華 42
麟 63
繩 96
繩 116
涵 136

盾 1
其芳 22
黙涵 49
其芳 69
涌 93
篤 101

蕪 108
蕪 115

揚 1
同姫昌 23
昌 33
天藍 46



第三党：黄琪翔，章伯鈞，徐名鴻ら

社会民主党：陳銘枢，王礼錫，胡秋原，梅翼彬ら

国家主義派：何公敢ら

馮玉祥系：徐謙，余心清ら

その他：陳友仁

なお、各人物の経歴などについては、

波多野乾一「福建独立をめぐる人々」(『東亞』7巻1号，昭和9年1月)を参照。

(12) のちに蔣光鼐が兼任。

(13) この三つの宣言は、人民革命政府秘書処，12月10日出版の「開国文献」に収録されている。

政府秘書処は、ほかに「革命之声」「革命政權」という小冊子も出版している(翊生，前掲記事19，『香港工商日報』1934年2月6日)。

(14) 「政府組織大綱」(「開国文献」，35頁)。

(15) 具体的政策としては、11月20日の人民代表大会で採択されたという「人民政綱」がある。が、「開国文献」には収録されていず、「蔡廷鍇自伝」は「通過人民權利政綱十八条」として全文を記録しているが、これは人民權利宣言の13ヶ条と政府成立宣言の中の政府の使命5ヶ条をつぎ合わせたものである(380～381頁)。陳友仁の暴露するところによれば、共産党系の策士が偽造したものだという(『東京朝日新聞』昭和8年12月3日)。そのためか、その後政府内部で検討されて12月13日に全文27ヶ条より成る新政綱が政府中央委員会で決定をみた(『東京朝日新聞』12月16日)というが、公表された様子はない。従って、結局は人民革命政府全員が一致して承認できる政綱は生まれなかったといえる。

二つの政綱の全文は、台湾総督府，前掲書64～67頁を参照。

(16) かつて同党の指導者であった鄧演達が起草し、1930年9月1日の同党大会で採択されたもの。

なお、第三党の正式名称は「中国国民党臨時行動委員会」という。1927年武漢政府から脱退した国民党左派分子を中心に結成され、宋慶齡を名義上の代表者とする。

(17) 鄧演達先生殉難十五週年記念会編「鄧演達的道路」(1946)，34～40頁。

(18) 田中忠夫「現代支那の基本的認識」(学生社，昭和12)，155頁。

(19) 前掲，「鄧演達的道路」，57頁。

(20) 各部・委員会の組織大綱はすべて，前掲，「開国文献」に収録されている。

(21) 1933年12月13日公布。全文は、『香港工商日報』1933年12月13日。

(22) 「實現三民主義，實行耕者有其田，計口授田，將共党所分田地，從新分配」を趣旨として，十九路軍が旧ソヴィエト区の所謂「善後区域」に設置した地方行政機関(前掲，「蔡廷鍇自伝」上，374頁)。

(23) 波多野乾一，前掲書，54～61頁。

(24) 『香港工商日報』1933年12月21日。

(25) 「文化委員会組織条例」(前掲，「開国文献」，58頁)。

(26) Isaacs, Harold: Radicalism and Realities—a Fukien close-up (“China Forum”, vol. 3, Decemder 21, 1933), p. 6.

(27) 1933年12月11日，中国革命行動委員会中央幹部委員会「第三党解散宣言」(『中国論壇』3巻3期，1933年12月21日)。

なお，同党の代表的存在である宋慶齡は，既に11月21日に福建事変に無関係であると声明している(「宋慶齡声明与閩变無関」，『中国論壇』3巻2期，1933年11月30日)。

(28) Isaacs, op. cit., p. 10.

(29) 各法令の全文は，台湾総督府，前掲書，164～70頁。なお，起草者は上海事変以来蔡廷鍇の秘書を勤める徐名鴻である。

(30) 潘漢年「十九路軍閩的『生産大衆政權』与土地政綱」(『紅旗』62期，1933年11月20日)。

(31) 『大公報』(天津)民国22年11月17日。

(32) 田中忠夫，前掲書，157頁。

(33) 『香港中興報』1933年12月22日。

(34) 田中忠夫，前掲書，156～57頁。

(35) Isaacs, op. cit., p. 7.

(36) 前掲，「開国文献」，32～33頁。

(37) 劉治平，前掲書，666頁。

(38) 橋本梯三「南支・福建の經濟情勢」(『東亞』7巻2号，昭和9年2月)。

(39) 劉治平，前掲書，658～59頁。

(40) 『香港中興報』1933年12月2日。

(41) 『香港工商日報』1933年12月2日。

(42) 上海—福州航路が封鎖されて省外からの米の輸入が困難となり，貯蔵米も少かったために採った方策であった(『香港工商日報』1933年12月23日)。

(43) 『香港工商日報』1933年12月15日。台湾総督府，前掲書，94～98頁。

(44) 劉治平，前掲書，666頁。

(45) 台湾総督官房外務部「南支那に於ける外国權益」(昭和13)，48～49頁。

(46) Isaacs, op. cit., p. 7.

(47) この点に関して次の如き情報がある。

①『東京朝日新聞』昭和8年11月22日は、陳銘枢の代理として韓賓礼が日本政府の諒解を得るため一兩日前に上海から来日した、と報道。

②『広州民国日報』民国22年11月29日によれば、台湾総督が抗日排貨の取消しを条件に陳銘枢に運動費を与えた、という（台湾総督警務局発、警高甲第25482号、「日本陸海軍文書」収録）。

同じく広東情報として、ジョンソン駐華アメリカ公使も、もし反蔣の叛乱を起したら百万ドル提供すると日本側から申し入れた、という話を覚書に記している（“Foreign relations of the United States”, 1933, vol. III, p. 469）。

③H. アイザックスが会った人民革命政府の或る高官は、政府樹立以前に「代表者たちが日本人と会った」と語っている（Isaacs, op. cit., p. 7）。

(48) 『東京朝日新聞』昭和8年11月25日。

(49) 同上、11月26日。

(50) 同上、12月6日。

(51) 同上、11月21日。

日本は、日清戦争の結果台湾を領有することになって以来、台湾の防衛上、治安上、対岸の福建省における外国勢力の伸張に特別な注意を払っていた。この警戒心は、明治31年4月、清国政府との間に調印された「福建不割譲ニ関スル交換公文」となった。翌年には福州と廈門に日本専管居留地を設定し、同地域内の行政権は全て日本に属することとなった（但し、両市の発展に結びつかないので、事実上利用していない）。

さらに大正4年、21ヶ条要求の第5号第6項において、福建省の鉄道・鉱山・港湾設備に関して日本の投資の優先権を主張するに至った。交渉の結果第5号全体が削除されてこの主張は通らなかったが、交換公文の形式によりほぼ初志を貫徹した（堀川武夫「極東国際政治史序説」、有斐閣、昭和33、13、144、299頁。台湾総督官房、前掲書、47～48頁）。

かくて、日本は福州と廈門に領事館をもち、この当時、福州には5百人余（1934年調査）、廈門に約9千4百人（1932年調査）の日本人がいた。但し、後者の9割は台湾人である（台湾総督官房、前掲書、48～49頁）。

(52) 『東京朝日新聞』昭和8年11月25日。『南華日報』1933年11月24日。

(53) 日本国際政治学会太平洋戦争原因研究部編「太平洋戦争への道」3巻（朝日新聞社、昭和37）、70頁。

(54) アメリカは教会勢力によって福建に地盤を築いてきたが、近年は十九路軍との関係が密接である。十九路軍はアメリカから飛行機を購入し、訓練もアメリカ

式である。また、事変前の福建省政府（主席蔣光鼐）は、福州—廈門間の鉄道借款を成立させ、農業や教育のアメリカ人専門家も招聘しており、省政府部内にはアメリカ留学生が多かった。

日本は、明治以来の協定（注51）に基づいて上記の鉄道借款には強く反対を表明したが、貿易上でも競争が続いている。初期においてはイギリスが大半を占めていたが、1920年代半ばから日本の進出が著しい（橋本悌三、前掲論文、49～50頁。田中忠夫、前掲書、363頁）。

(55) 前掲、「太平洋戦争への道」3巻、70頁。

(56) 注47の②参照。

(57) 李濟琛、蔡廷鍇の談話（『香港工商日報』1933年12月2日、『東京朝日新聞』12月11日）。

(58) 陳銘枢らは、11月19日、同27日の2回にわたり西南派に通電を發して、一致して行動を起すことを訴えた（劉治平、前掲書、670、672頁）。

(59) 西南派は胡漢民の主張を中心にまとまった。その趣旨は、福建に対しては「聯日容共」政策を責め、国民政府には「独裁虐民、降日売国」政策が今事変の原因であるとして、中央の政治制度改革と蔣介石・汪精衛の下野を要求して、第三者、調停者の立場をとった（劉治平、前掲書、669～685頁。台湾総督府、前掲書、105～110頁）。

(60) 「中華蘇維埃臨時中央政府致福建人民革命政府与十九路軍の第一電」（『紅色中華』149期）。発信人は毛沢東と朱徳。

(61) 「中華蘇維埃臨時中央政府致福建人民革命政府及人民革命軍第二電」（同上）。

(62) 1933年12月5日「中国共産党中央委員会為福建事变告全国民衆」（『闘争』〔蘇区〕38期、1933年12月12日）。

(63) 「中国共産党中央委員会為福建事变第二次宣言」（『闘争』〔蘇区〕45期、1934年2月2日）。

(64) 胡華、前掲書、280頁。

(65) 蜂屋亮子「中国共産党蘇区中央局の成立と毛沢東」（『アジア研究』17巻1号、1970年4月）は、中ソ共和国主席としての毛沢東は本音を吐かなくなり、その発言上の抑制は1940年まで認められる、と述べている。

(66) 1935年6月に懋功で張国燾が朱徳から聞いたもの（張国燾「我的回憶」、『明報月刊』5巻1期、1970年1月、83頁）。

(67) Rue, John E.: Mao Tse-tung in opposition, 1927～1935 (Stanford University Press, 1966), p. 26.

(68) 石川忠雄、前掲論文、318～19頁参照。

(69) 「中華蘇維埃共和国中央政府為福建事变宣言」（『紅

三鶴 248
 文 256
 武 273
 思 278
 深 287
 益 293
 敬 3
 暇 18
 田 25
 鴻 36
 毅 48
 陶 70
 華 79
 中 85
 93
 彝 111
 之 127
 衡 144
 瑤 151
 眠 169
 元 199
 琴 213
 忱 219
 落 226
 承 233
 辛年 3
 特 24
 樸 50



- 色中華』149期)。
- (70) 毛沢東「中華蘇維埃共和国中央執行委員会与人民委員会第二次全国蘇維埃代表大会的報告」(『紅色中華』第2次全蘇大会特刊3期, 1934年1月26日)。
- (71) Hsiao, Tso-liang: Power relations within the Chinese communist movement, 1930~1934, vol. I (University of Washington Press, 1961), p. 273 は、「この報告は五中全会の二ツ大会への指示を基礎にして起草された」と述べている。
- (72) 竹内実監修「毛沢東集」4巻(北望社, 1971)収録の、「關於中央執行委員会報告的結論」を参照。
- (73) 蜂屋亮子, 前掲論文は、「毛沢東は自分が主宰できない蘇区中央局においては, 自分の上位者と衝突するような論陣を張ることを意識的に避けた」述べている(36頁)。
- (74) 「福建事変与我們的任務」(『紅旗週報』63期, 1934年1月。Hsiao, Tso-liang: Power relations within the Chinese Communist movement, 1930~1934, vol. II, pp.251~52 所収)。
- (75) 「福建事変問題——党小組会討論材料」, 陳誠コレクションに含まれている謄写印刷の小冊子。
- (76) 凱豊「論中華蘇維埃中央政府所公佈的对十九路軍的協定」(『闘争』〔蘇区〕48期, 1934年2月23日)。
- (77) 龔楚「我与紅軍」(香港, 南風出版社, 民国43), 397頁。
- (78) Dorrill, op. cit., pp. 35~36。
- (79) 前掲, 『紅旗週報』63期社論。
- (80) 博古は, 1934年7月, マルクス主義研究会の講演で, 福建事変に当っての党工作の弱点を十九路軍士兵を獲得できなかった点でだけ捉えている(「為着實現武装民衆的民族革命戦争, 中国共産党做什么和将做些什么?」3節, 『闘争』〔蘇区〕69期, 1934年8月4日)。
- (81) これは, コミンテルン執行委員会第12回総会の決議に基づいて, 「下からの統一戦線」戦術を検討するようとのコミンテルンからの勧告によるものであった(ア・エム・グリゴリエフ「コミンテルンと, ソヴェトのスローガンのもとにおこなわれた中国の革命運動」, 国際労働運動研究所編・国際関係研究所訳『コミンテルンと東方』, 協同産業, 1971, 293頁)。
- (82) 「中央給満州各級党部及全体黨員的信——論満州の状況和我们党的任務」(『闘争』〔蘇区〕18~20期, 1933年7月15日~8月5日)。
- なお, 満州における抗日民族統一戦線については, 毛里和子「中国共産党の抗日民族統一戦線理論の形成における若干の問題——東北抗日運動を軸にして」(『国際問題研究』1号, 1938年12月)に詳しい。
- (83) 基本原則は以下の4点である。
- ①政治上, 組織上における党の独立性の堅持。
 - ②各グループ毎に提携の程度と範囲を具体的に考える。
 - ③下層統一戦線が基礎であり, 上層統一戦線は下層統一戦線が強固になり, 上層に脅威を与える時にのみ可能であり, 有効である。
 - ④民族資産階級と統一戦線を組む場合には, プロレタリアートの指導権が必要である。
- (84) 「中国共産党中央委員会の満州省委に対する書簡」(満州国軍政部「満州共産匪の研究」1輯, 康德4)。
- (85) 毛里和子, 前掲論文, 58~59頁参照。
- (86) 博古, 前掲論文, 2節。
- (87) 『闘争』〔蘇区〕20期。
- (88) 1933年6月8日「中央致各級党部及全体同志的信——論反帝運動中的統一戦線」(『闘争』〔蘇区〕21, 22期)。
- (89) 共産アカデミヤ附属世界政治経済研究所植民地部支那学術調査研究所編「植民地民族革命に於けるコミンテルンの戦略及び戦術——支那を実例として」(外務省調査部, 昭和15), 401頁。
- (90) 陳雲「福建事変中党在福建的職工運動」(『闘争』〔蘇区〕58, 59期, 1934年5月5日, 15日)。
- (91) アンリ・バルビュスとロマン・ロランの発起により, 1932年8月アムステルダムで開催された国際反戦大会の決議に基づいて召集されたもの。1933年9月30日, 上海で開かれ, イギリスのマレー卿を団長とする4人の国際代表と59人の中国側代表が集まった(波多野乾一, 前掲書, 183~225頁)。
- (92) 1933年10月12日, 中国共産党江蘇省委員会の総結(同上, 234~38頁)。
- (93) コミンテルン執委第13回総会での報告(前掲, 「植民地民族革命に於ける……」, 408頁)。
- (94) 1934年4月10日, 「中国共産党中央委員会為日本帝国主义強佔華北, 併呑中国告全国民衆書」(『闘争』〔蘇区〕59期)。
- (95) 1934年5月3日, 中国民族武装自衛委員会籌備会「中国人民対日作战基本綱領」(波多野乾一「資料集成中国共産党史」4巻, 311~18頁)。これは抗日救国六大綱領といわれ, 内容は以下のとおり。(1)全陸・海・空軍の総動員, (2)全人民の総動員, (3)全人民の武装, (4)日本の在華財産及び売国奴の財産の没収, 国庫の収入, 国内外からの寄附などを抗日軍費にあてる, (5)労働者・農民・兵士・学生・商人の代表で中国民族武装自衛委員会をつくる, (6)日本帝国主义の一切の敵との聯合。
- (96) 王健民「中国共産党史稿」3編(台北, 民国54),

30頁。
 (97) 王明「中国共産党是中国反帝与土地革命中的唯一
 的領袖」(『闘争』〔蘇区〕66期, 1934年6月23日)。
 (98) 『歴史評論』239号, 1970年7月, 46頁。
 (99) B. レイプゾン・K. シリーニヤ著, 石堂清倫訳
 「現代革命の理論——コミンテルンの政策転換」(合
 同出版, 1966), 94~101頁参照。
 (100) Wan Ming: The struggle of the Chinese Red
 Army against Chiang Kai-shek's 6th drive ("Com-
 munist International", vol. 12, no. 1)。

(101) 八・一宣言の発出主体に関しては従来見解の分れ
 るところであったが, 前掲, 「コミンテルンと東方」
 所収の, カ・ヴェ・ククシキン「コミンテルンと中国
 における抗日民族統一戦線」は, 八・一宣言がコミン
 テルン第7回大会の期間中に中国の代表によって作成
 され, コミンテルン執委で審議・可決された, という
 新しい事実資料を提出している(297頁)。
 (102) 毛沢東「日本帝国主義に反対する戦術について」
 (『毛沢東選集』1巻上), 204頁。

センター出版物目録

東洋文庫近代中国研究室中文図書目録

- 2. 78頁 B 5 頒価 600円
- 3. 180頁 B 5 頒価 2,000円

東洋文庫近代中国研究室邦文図書目録

- 1. 204頁 B 5 頒価 700円
- 2. 165頁 B 5 頒価 700円

東洋文庫近代中国研究室欧文図書目録

- 2. 44頁 B 5 頒価 280円

中国関係日本文雑誌論説記事目録

- 1. 「外事警察報」「北京週報」「燕塵」の3誌。
240頁 B 5 頒価 800円
- 2. 「支那時報」「東亜」「情報」「調査月報」
「特調班月報」の5誌。
244頁 B 5 頒価 900円

『解放日報』記事目録

- 1. 民国30, 31年分。243頁 B 5 頒価 1,400円
- 2. 民国32, 33年分。296頁 B 5 頒価 1,800円
- 3. 民国34~36年分。439頁 B 5 頒価 2,500円

経世文編総目録

- 1. 197頁 B 5 頒価 220円
- 2. 371頁 B 5 頒価 440円
- 索引 149頁 B 5 頒価 200円

近代中国研究

- 第1輯 347頁 A 5 頒価 900円
- 第7輯 483頁 A 5 頒価 2,200円

鴉片戦争の研究(資料篇)

- 佐々木正哉編
319頁 A 5 頒価 2,000円

鴉片戦争後の中英抗争(資料篇稿)

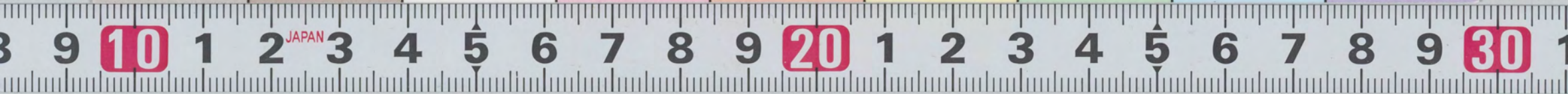
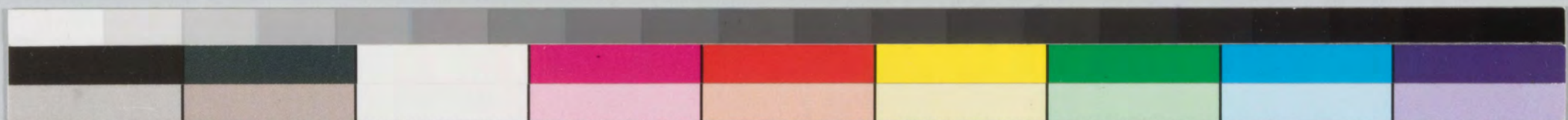
- 佐々木正哉編
436頁 B 5 頒価 1,800円

近代江南の租棧

- 中国地主制度の研究 村松祐次著
808頁 A 5 頒価 5,000円

近代中国研究センター彙報

- 7, 9~14
頒価各250円(12号のみ400円)



阿片 雑記

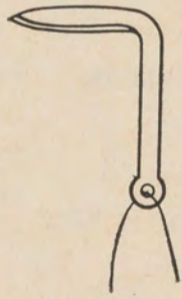
長坂 弘之

私が長坂氏を知ったのは、私が1970年7月5日附の『中日新聞』サンデー版に、“アヘンはケシの実からでる乳状液を固めて粉にしたもの”、“常飲しているうちに精神も肉体もまひして、廃人となってしまふ”と書いたことに由来する。氏はすぐに私に、粉にするとか廃人になるという記述は間違っているといつてよこした。これから2、3回文通を重ねるうちに、私は氏のアヘンにおける経験は活字にするに値すると思ひ、氏の2通の手紙を編集して「阿片雑記」と題し『彙報』に載せる許しをもとめたところ、氏は快諾された。この一文は以上のようにして印刷されるにいたつたのである。なお長坂氏の手紙の一節を次に抜き書きして、氏の紹介にかえたい。(市古宙三)

“小生は大正15年より台湾巡查を拜命、台南州で勤務しておりましたが、当時は御存じの様に、台湾人に限り阿片吸食の習慣のあるものに吸食を許可しておりました、その取締りに従事致しておりましたが、衛生事務を取扱っておりましたので、相当詳しく見ております。昭和14年より蒙古聯合自治政府の警務指導官となりましたが、後に薩拉齊県の特産科(阿片、塩、曹達等の特産物を扱う)の指導官に成り、ケシの栽培、採取、収買の監督を致しておりました。サラチ県は蒙古政府の管内でも阿片の産額が一番多く、春の始めから煙地(ケシの畑)の一筆調査、これには水地(かんがい用水の有る畑)、乾地の別、1、2、3等級の別、実面積を調べるのですが、敵匪(中国軍)の動きを見ながらやるので随分骨が折れました。ケシの成長に伴って作柄調査を3回位やります。最後に採取時の監視と収買。そしてそれを県城まで搬入する危険な仕事もありました。”

1. 阿片の採取・製造の方法について

ケシからアヘンを取るのは未明から午前10時頃迄で、2人で組んで採取するので畑のうねを3、4米間を置いて進みながら前の者が首からぶら下げた小刀(此の図のような鎌をちいさくした形のもの、大人の人さし指をまげた位)でケシの実(大人の手よりやや小形)に5、6本の横すじを入れて行きます。後に行く者は丁度日本の杯のようなものを手に持っていてケシの実の乳液を指でこき取り、杯へなすりつけるようにしてためて行きます。杯に8分目位たまると腰につけているかめ(茶色の1升位入る大きさのもの)に入れます。こうしておそくも午前10時にはやめてしまいます。昼間は液の出かたがずっと少なくなるからといわれております。そうして5、6日するとその畑へまた来て、ケシの玉の反対側を切って採取します。こうして4回か5回採取してケシの玉に筋が一杯つくとおしまいに成る訳です。乳液は杯にあるうちに濃い茶色に成ってしまうので、かめの中は丁度味噌を入れたと同じようです。さてこの阿片(採取したばかりのは、煙土といっていました)は



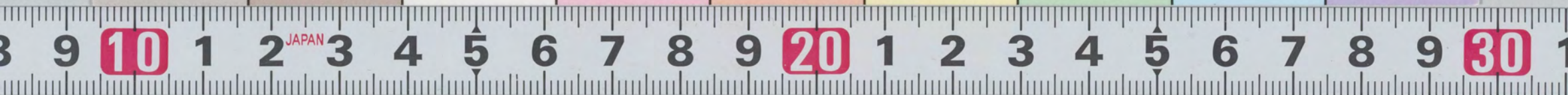
沢山の水分を含んでいますので天日に干して水分をのぞきます。1尺に3尺位の大きさに深さ2寸位の厚い板で作った専用の箱があり、3尺位の長さの特別なおさじ(おしゃもじ)で時々かきまわし乍らねん土位のかたさになる迄干しかためる訳です。そして出来たのが粗製阿片で正しくはこれを煙土と呼んでいました。

これを精製阿片にするにはまた水を加えてよくかくはんし、夾雑物を除き再三よくかくはんして水分を徐々になくして出来上るのです。それで出来上ったものは可なり固い味噌のようなもので「粉」ではない訳です。(以上は蒙古自治政府管内の状況であります、他所でも同じと思います。)

2. 吸食の器具及び吸食の方法等について

阿片を吸食するには色々な道具が入用です。一通り説明しますと、

- (1) 煙槍(エンチャン)
- (2) 匙の類
- (3) 太い針
- (4) ランプ
- (5) 阿片の容器
- (6) これ等をのせる盆
- (7) 枕



(1) 煙 槍

一番肝心の道具で、日本の刑法に定める吸食用の器具はこれを指す訳です。

右図のよう竹は全長1尺位、太さは1寸位です。

きせるの雁首に当

る部分は白、または茶色の陶器で盃を二つ合わせたような形で、上になった盃の底の真中にマッチの頭位の穴があいております。吸口は主に真鍮ですが、後に述べるように力を入れて吸うのでかなり頑丈に出来ていました。

北支では自由販売で誰でも入手出来ましたが、小生が台湾にいた頃は吸食の許可証を持って行って購入するので、吸食者が死亡した時は警察署へ持参して破毀してもらう規定になっていました。

(2) 匙の類

錫色をしたもので、図のようなものです。

物の乗る処は形が一定しておらず、2、3本置いてありました。

(3) 太い針

これも2、3本。錫色したもので丁度畳針のようなものです。

(4) ランプ

阿片をあぶるランプで、背はせいぜい10糎位で太いホヤのついた独特のものです。

(5) 阿片の容器

高さ3糎～4糎位で真鍮製の図のようなもので、外に花鳥や文字が彫り込んであります

が、見事な秘画の彫刻のあるのも見た事があります。

(6) 盆

大体沢山の道具が入るので頑丈なそして美しい模様のあるものが用いられていました。

(7) 枕

阿片を吸うときは横臥するのでかなり大形の枕が必ず置いてありました。

吸食の方法

- (1) 先づ阿片を針で少しとります。(マッチの頭の3倍位)
それを匙の上へおけて練るのですが、少しの間こねているといくらか白くなって来ます。(ランプの火の上でねる)
- (2) それを針の先へつけて(丁度飴を箸の先へつけるような調子です)ランプの火の上でくるくるまわして加熱します。
- (3) するとぶくぶくふくれてかすかに煙が出ます。
- (4) これを急いで煙槍のがん首の穴へつけて、吸口から力を入れて吸います。阿片は雁口へつけられても少し煙を出し乍らぶくぶく泡を立てていますが、5回位吸われるとおしまいになって黒い灰(煙灰)になってがん首の穴へついてしまいます。
- (5) 針の、灰をかき落す形になっているので煙灰をかき取る。
- (6) これで一回の終了です。

阿片を吸うのは1服で終る者もあり、一度に2、3服やるものもおります。概して吸食の時刻はきまっています、1月に3、4回が普通です。

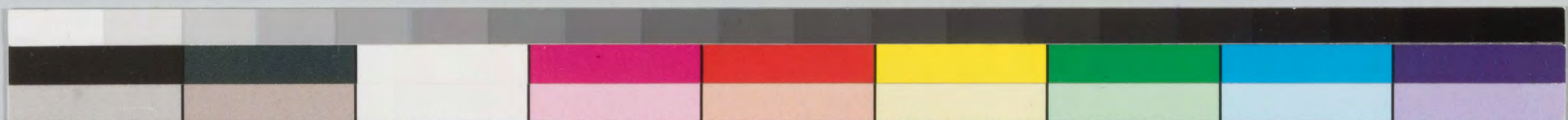
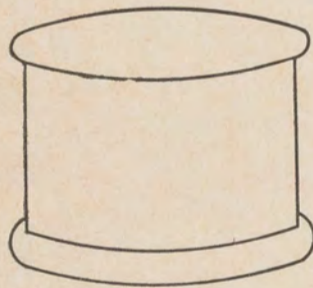
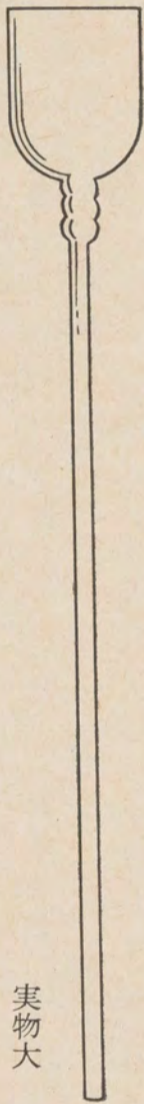
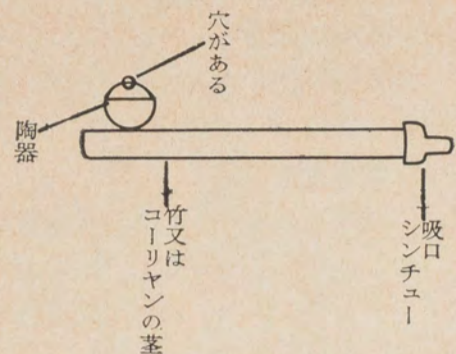
阿片を吸食する時には特有のにおいがします。夜、裏町を歩いていると、プーンとにおって気持ちのいいものでした。においは一寸説明できませんが、小豆を煮ていて焦げつかせたにおいが幾分似ているようです。

3. 台湾に於ける阿片の取締と吸食の許可について

台湾の日本統治時代における阿片の取締(許可制度)が何時から始められたかはよく知りませんが、多分領台後余り年月を経ない頃と思われまます。(小生は大正15年3月台湾総督府の警察官練習所へ入所しましたが、卒業迄の間に内地と違う特殊な方面への実地見学があり、その中に専売局も有って、阿片の精製、吸食等の実況と、阿片とその取締についての講習を受け、概念を学びました)。

当時は地方に専売局から卸売を受ける取扱人が、都市に1、2名おり、その下に直接吸食者に販売する小売人が各街庄(町村)に1名、市には数名おりました。

当時吸食の癖あるもの(癮者)がどうして吸食の許可を受けていたかは詳にしませんでしたが、吸食者が漸減し、反面密吸食者があって大陸からの密輸入が絶えない



ので（本来の目的は専売益金を増加させる事であったと思われるが）、昭和5年頃密吸食者の検診を行って多数の者に許可を与えました。当時この仕事にたずさわりましたが、吸食の申告をした者を3日間監禁して、禁断症状の実状を専門医が検診しました。当時小生は台南州の虎尾郡に勤務しておりましたが、大きな公会堂の広間へ吸食者を収容し、飲食物も一定のものを警察官が与えて厳重に監視していたので、3日目には禁断症状が強く顕われるものもあり、物凄い状況でした。どの位許可を得たかは記憶にありませんが、殆んど大部分の者が申告の通り（1日の吸食量を申告させた）許可になったようでした。

直接日常の取締は

(1) 小売人の取締

小売人は吸食者へ毎日売渡す分と卸売人からの買受量、毎日の残高を記入した簿冊がある訳で、それと残量を見るのですが一見して正、不正を見破る事は不可能で形式的に簿冊へ印を押して来るようなものでした。（卸・小売人ともその地区のボスで警察と深いつながりのあるもので、密吸食者等への横流し等の犯罪は先ず起きないものとしていました）

(2) 吸食者の取締

吸食者は1日「2匁」「3匁」などと1日の吸食量がきめられていて購入通帳によって小売人から買受け、また毎日の吸食量を記入して残量を示しておるので、これと実物とを対比して、(1)密吸食者への横流しの有無、(2)月に1回煙灰を捨てるのですが、その量がそれまで吸食した阿片に相応するだけあるかどうか、(3)吸

食場所（出来るだけ家族のいない部屋、特に年少者のいる処で吸食してはいけない）が適当であるかどうか、(4)密輸入の阿片を入手していないか、等を視察していた訳です。

(3) 密吸食者の取締

前科その他によって密吸食者としてマークしてある者を注意していたので、時々家内に立入って検査もやりましたが、この種のものには実に巧妙で検挙した事は殆んどありませんでした。

(4) 密輸入の取締

台湾の西海岸はどこも遠浅で竹筏フツパイなどを用いれば何処へでも上陸出来るので、海岸を管轄している警察は絶えず密輸入の取締りを行っておりました。虎尾郡も西海岸に属しておりましたので、時々行っておりましたが見付けたのは5年間に2度位のものでした。

(5) 台湾での阿片取締は世界中比肩する所がない様に聞かされておりましたが、確かに他の国より整然とした取締りが行われていた事は事実のようでした。

阿片を生産せず輸入品による専売制度を行っていた事も当時世界唯一だったと思います。但し煙灰の取締は全く無策で取締の警察官が容器から地面へあけて靴でふみつぶすというやり方で、改正が要求されておりましたが、小生が台湾におるうち（昭和10年まで）はその儘でした。

なお阿片は専売局で精製し、白い甕に入れて卸したので、小売人は秤にかけて販売していましたが、昭和4年頃からチューブ入りで販売するようになりました。

中共
隊
拡大
列寧
中国
蘇聯
的
日
「坐

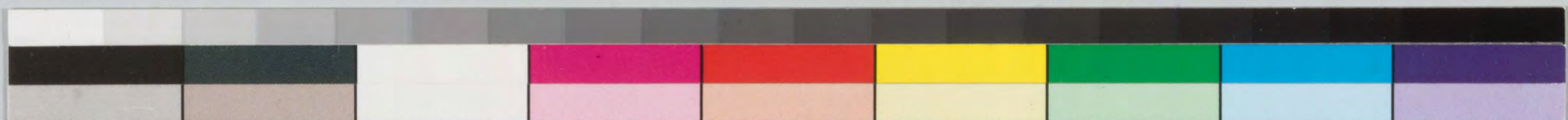
把革
反对
民衆
列寧
19
中国
蘇区

關於
關於
對於
興國

中央
關於

火力
動
陳雲
勝利
興國

擁護
産
献給
怎樣
機
優待



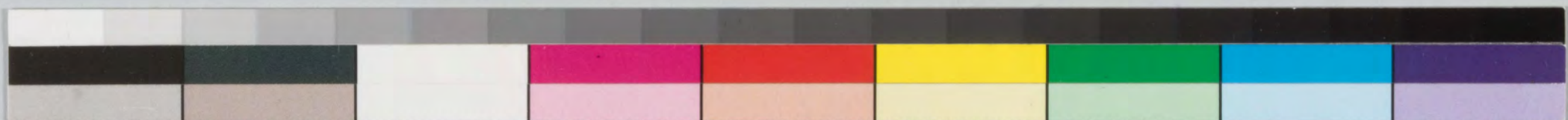
『闘争』（江西）記事目録

『闘争』（江西）は1933年2月4日創刊、10日刊ないし週刊で発行された中国共産党蘇区中央局機関報である。江西ソビエト区において発行された『紅色中華』、『青年実話』、『紅星報』、『党的建設』等とともに江西ソビエト研究にとって「第一級」の資料であることはいままでもない。『闘争』は蒋介石の囲剿を前に党内の危機、機会主義・羅明路線にたいする理論闘争を展開し、党中央の進攻路線をすすめるうえで重要な役割をはたし、また、ソビエト区における大衆の文化水準の向上にとっても大きな貢献をなした（第2次ソビエト代表大会での毛報告）。1934年時における発行部数は27,100部（王健民：中国共産党史稿における数字）といわれる。

『闘争』（江西）の解題については、姫田光義氏による懇切な紹介ならびに分析がある⁽¹⁾。ただ、そこでのべられている「長征直前まで、66期（1934年9月25日刊）分が出版された模様〔……全63期分につき検討しうる〕」とされている点について訂正と補足をさせていただくならば、長征直前までの発行は、1—73期（1933年2月4日—1934年9月30日）で、このうち lack は32, 33, 36, 37, 39期の5期分、したがって68期分が活版で出された分。これは複製本として東洋文庫に所蔵されている。このほか、長征開始後の発行である96期（1936年4月24日刊）と、104—110期（1936年7月2日—1936年9月5日）〔うち106期欠〕の7期分について、マイクロフィルムで散見できる。これらはいずれも油印、20ページ前後の紙数で、非常に判読しにくい部分が多い。96期は蘇区中央局発行、104期以下の方は中共中央局発行となっている。それにしても、長征期中における党内の実態を知る貴重な資料であることに変わりなく、またこれによって長征出発後も、頻度に異動があるとしても継続発行されていたということは確認できる。それゆえ蘇区中央局機関報という枠にとらわれずつけ加えた。したがって現在日本で見ることのできる『闘争』（江西）は長征期中のものを含め75期分ということなる。なお、『闘争』の終刊期日、号数について、またどのような党の決定によってこれが発展的解消をとげたのかはまだ明らかでない。この記事目録の作成には、Hoover Institution 所蔵のマイクロフィルム（Nym Wales の蔵印あり）と石叻資料室所蔵本の複製本を使用した。

(1) 姫田光義：『紅色中華』 アジア経済資料月報 13(1) 1971. 1: 38—50

			關於新的領導方式（1）	洛甫	6
			轉變我們的宣傳鼓動工作	尚昆	8
	第1期（1933年2月4日）				
	党報委員會的通知	1	自我批評——沒有下文的空洞計畫（炳），		
	追悼趙博生同志	亮平	1	必須澈底改造的党的組織的一個例子（炳），	
	在革命与戰爭的前面——共產國際十二次全			何等客氣的要求！（炳）	11
	會的總結	洛甫	2	把好的模範拿來！	党報委員會 12
	〔蘇聯社會主義建設的勝利	尚昆		党報啓事	12
	實際為鞏固与加強無產階級領導權而鬥争的				
	檢討	鄧穎超	13		
			第3期（1933年2月23日）		
	第2期（1933年2月14日）		中央局關於閩粵贛省委的決定	中央局	1
	關於在粉碎敵人四次「圍剿」的決戰前面党		少共蘇区中央局關於開展反羅明路線鬥争的		
	的緊急任務	中共中央局	1	決議	少共中央局 2
	關於「三八」國際婦女節的決議	中央局	3	工農紅軍學校第四期畢業學生中全体黨員團	
	開展民族革命戰爭反对日本帝國主義的進攻			員及連一級以上幹部的黨員團員大會決議	
	与国民党投降売国	博古	4	（1933. 2.16）	3
				擁護党的布爾雪維克的進攻路線	博古 4



什麼是羅明同志的機遇主義路線？
 什麼是進攻路線？
 反对腐朽的自由主義
 自我批評——把一切責任放到支部同志身上
 (炳)

洛甫 10
 任弼時 15
 尚昆 18
 20

第4期(1933年3月5日)

遠東戰爭与共產主義者在反对帝國主義戰爭
 反对武装干涉蘇聯戰爭中的任務——共產
 國際執行委員會第十二次全會的決議案根
 拠長岡同志的報告
 馬克思逝世五十週年紀念
 布爾塞維克的工作方法(『真理報』社論,
 1932年7月9日)
 国民党在「剿匪区」内的土地政策
 自我批評——硬化的千篇一律的工作報告
 (炳), 吊在空中的兩條戰線(炳)

1
 尚昆 5
 8
 洛甫 10
 16

第5期(1933年3月15日)

布爾塞維克的閩粵贛省臨時代表大會
 閩粵贛省臨時代表大會上的革命競賽條約
 ——上杭, 長汀, 寧化三縣革命工作競賽
 條約
 熱河的失守与蔣介石的北上
 目前黨組織上的中心工作
 關於新的領導方式(2)
 一個模範支部的工作報告

1
 2
 洛甫 3
 6
 洛甫 12
 15

第6期(1933年3月25日)

環繞於熱河事變周圍的國際形勢
 紀念「三二一」与「四一二」
 黨的幹部問題(『國際通訊』35期)
 叛徒們的欺騙宣傳与鉄一般的事實

1
 尚昆 4
 7
 亮平 11

第7期(1933年4月5日)

斯達林同志給阿勒哈羅維奇与阿里使多夫兩
 同志的覆信——關於給『無產階級革命』
 雜誌編輯部論『布爾什維克主義歷史的幾
 個問題』的信
 為創造一百万鉄的紅軍而鬪爭
 長汀最近擴大紅軍所得的經驗
 目前肅反工作中的戰鬪任務
 叛徒們的欺騙与鉄一般的事實(續完)

1
 穎超 5
 滴人 8
 葛耀山 11
 亮平 14

第8期(1933年4月15日)

羅明路線在江西

洛甫 1

會尋安三縣黨積極份子會議決議
 試看鄧小平同志的自我批評
 論目前階段上蘇維埃政權的經濟政策
 工農紅軍第一方面軍師以上黨團員積極份子
 會議
 自我批評

6
 羅邁 8
 博古 12
 18
 炳 20

第9期(1933年4月25日)

五一勞動節的口號
 關於五一勞動節的決定
 關於蘇区工人的經濟鬪爭
 在反羅明路線鬪爭中寧化黨的工作
 健全支部生活的幾個中心問題
 上海黨「一二八」徵收運動的初步總結(中
 央『鬪爭』36期)

1
 中央局 2
 陳雲 4
 亮平 8
 羅邁 10
 13

第10期(1933年5月1日)

為五一節徵收黨員運動告蘇区民衆書
 中國共產黨蘇区中央局
 今年的五一勞動節
 紀念五一論紅軍建設中当前的幾個重要問題
 五一節与勞動法執行的檢閱
 团的春季冲鋒季工作的總結
 自我批評——平均主義是具体領導最兇惡的
 敵人(凱豐), 克服錦標主義的革命競賽
 (小超), 好模範!(小超)

1
 然之 2
 亮平 3
 洛甫 7
 作霖 12
 15

第11期(1933年5月10日)

論蘇維埃經濟發展的前途
 怎樣解決糧食問題
 關於夏耕運動
 為擴大一倍新黨員而鬪爭
 列寧和聯合中農問題

洛甫 1
 亮平 5
 尚昆 8
 弼時 10
 15

第12期(1933年5月20日)

閩粵贛黨春季冲鋒季及四月競賽工作的總結
 与教訓
 江西省三個月工作總結會議的總結
 為黨的路線而鬪爭
 江西省委對鄧小平毛沢覃謝唯俊古栢四同志
 二次申明書的決議(中央局批准)
 工農紅軍學校黨團員活動份子會議關於江西
 羅明路線的決議

陳壽昌 1
 李富春 4
 羅邁 8
 15
 16

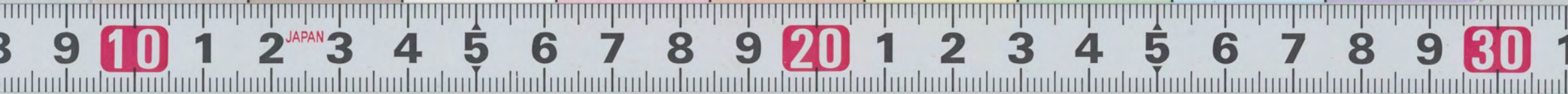
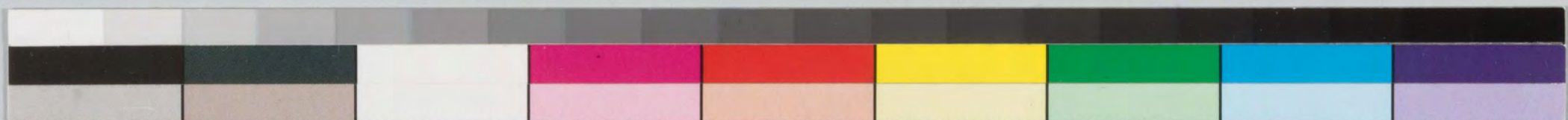
第13期(1933年5月30日)

中國共產黨蘇区中央局為「五卅」八週年紀

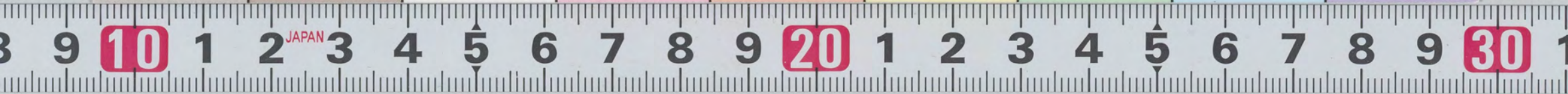
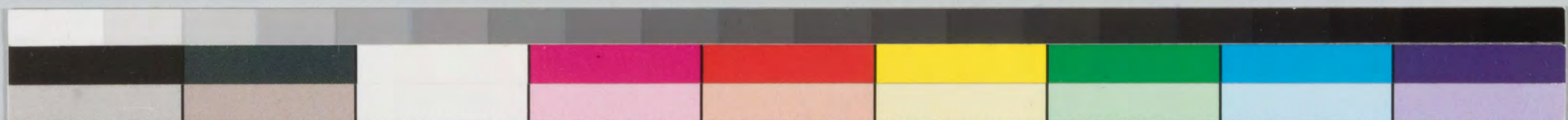
Oct
 念重
 中国的
 健全支
 關於共
 共產
 列寧和
 最光榮
 給今年
 開展反
 蘇維埃
 健全支
 華北傳
 閩贛兩
 蘇維埃
 建寧中
 列寧和
 為擁護
 廣告
 国民党
 論目前
 反動記
 宣傳隊
 火力向
 論目前
 新的任
 關於合
 論新区
 中央給
 滿州
 為加強
 林同
 怎樣訂
 動合
 關於合
 這個巡



6	念宣言	1	国民党区域内工人鬭爭的開展(上海通訊)	懷冰	19
邁 8	中国的民族危機与他的出路	洛甫	2	第19期(1933年7月25日)	
古 12	健全支部生活的幾個中心問題(統第9期)			中国共產党中央委员会為「八一反帝鬭爭」	
18	關於共產國際及其各支部的宣傳活動提綱——			与紅軍紀念日告全体紅色戰士	1
炳 20	共產國際第五次世界大会通過	10		關於擴大紅軍的決議	中共中央局 2
	列寧和聯合中農問題	斯大林	15	今年的「八一」与帝國主義戰爭的危險	5
	第14期(1933年6月5日)			在不断勝利中前進的蘇聯——節訊斯大林同	
1	最光榮的模範	1		志今年一月八日的演講	9
史局 2	給今年國際青年節的贈品——「少年國際師」	凱豐	3	中央給滿州各級党部及全体党員的信(統)	
雲 4	開展反對開小差的羣衆運動	鄧發	5	——論滿州的現狀和我們党的任務	14
平 8	蘇維埃政權下的階級鬭爭	洛甫	6	第20期(1933年8月5日)	
邁 10	健全支部生活的幾個中心問題(統完)	13		關於收集糧食運動中的任務与動員工作	
	第15期(1933年6月15日)			中共中央組織局	1
13	華北停戰協定簽訂之後	洛甫	1	紅五月徵收党員的結果与教訓	羅邁 4
	閩贛兩省五·一勞動節工作的檢閱	羅邁	5	關於新的領導方式(3)	洛甫 8
	蘇維埃政權下的階級鬭爭(統完)	洛甫	9	目前蘇区的現金問題	亮平 13
史局 1	建寧中心县委擴大會議的成功	作霖	14	中央給滿州各級党部及全体党員的信(統完)	中央 14
之 2	列寧和聯合中農問題	斯大林	15	論農村中的階級鬭爭——答復李同志的信	16
平 3	第16期(1933年6月25日)			第21期(1933年8月12日)	
甫 7	為擁護蘇聯及反對帝國主義国民党的新的挑			中共中央關於帝國主義国民党五次「圍剿」	
霖 12	釁告全党同志和一切勞苦羣衆書			与我們党的任務的決議	1
	中国共產党中央委员会	1		中央致各級党部及全体同志的信——論反帝	
15	国民党對於中国民衆之又一陰謀	5		運動中的統一戰線	7
	論目前階段上蘇維埃政權的經濟政策	博古	9	二次蘇大会的改選運動与蘇維埃的德謨克拉	
	反動記者口中的鄂予皖蘇区与湘鄂西蘇区	14		西	洛甫 9
甫 1	宣傳隊應該如何工作的一個實際例子	昆	16	論農村中的階級鬭爭(統完)——答復李同	
平 5	第17期(1933年7月5日)			志的信	洛甫 15
昆 8	火力向着右傾機會主義	洛甫	1	第22期(1933年8月15日)	M
時 10	論目前階段上蘇維埃政權的經濟政策(2統)	博古	4	為建立反對法西斯蒂的統一戰綫告各国工人	
15	新的任務与新的力量	列寧	7	共產國際執行委员会	1
	關於合作社	寿昌	12	論德国目前的形勢——1933年4月1日共產	
	論新区与辺区的肅反工作	鄧發	15	國際執委主席团通過的決議	3
寿昌 1	第18期(1933年7月15日)			致德国共產党中央委员会的信	
富春 4	中央給滿州各級党部及全体党員的信——論			中国共產党中央委员会	7
邁 8	滿州的狀況和我們党的任務	1		中国革命危機的新階段	米夫 8
15	為加強党对革命戰爭的領導而鬭爭——譚震			中央致各級党部及全体同志的信(統完)	中央 14
	林同志和我們的分歧	寿昌	5	第23期(1933年8月22日)	
16	怎樣訂立勞動合同——汀州市京菓業訂立勞			為新区辺区工作的布爾塞維克的轉變而鬭爭	羅邁 1
	動合同的經過	陳雲	8	克服工会工作的落後	陳雲 8
	關於合作社(統完)	寿昌	13	中国革命危機的新階段(統完)(『共產國際』	
	這個巡視員的領導方式好不好?	陳雲	17	1933年4月)	米夫 13



反对向困難投降的右傾機會主義	亮平	17	關於十月革命十六週紀念節及中華蘇維埃臨時中央政府成立兩週年紀念的決定		2
第24期 (1933年8月29日)			俄国十月革命的研究	洛甫	3
粉碎敵人五次「圍剿」中央區紅軍的緊急任務	周恩来	1	經濟建設的初步總結	亮平	9
查田運動的初步總結	毛澤東	4	優待紅軍家屬及歸隊運動的模範	漢年	15
論中東路的出賣——答覆帝國主義的代言人伍德海	拉狄克	12	第30期 (1933年10月14日)		
工人師少共國際師的動員總結與今後四個月	潘漢年	15	關於中国法西斯蒂的提綱	中央宣傳部	1
蘇區團的組織狀況與我們的任務	凱豐	26	論法西斯主義	哀爾柯里	7
第25期 (1933年9月5日)			俄国十月革命的研究 (續完)		14
論帝國主義瓜分中国与国民党的五次「圍剿」	洛甫	1	中央給閩浙贛省委信		18
把提拔新的幹部当作組織上的戰鬥任務	羅邁	10	第31期 (1933年10月21日)		
中央組織局給蘇區各級黨部的指示信——關於健全地方支部生活的問題		15	在全蘇區教育大會的前面	凱豐	1
革命軍部隊的任務	列寧	19	列寧論共產主義的教育		4
第26期 (1933年9月15日)			五次「圍剿」決戰前面江西省的代表大會	羅邁	9
滿州磐石人民革命軍為反对日本強盜「圍剿」			尋鄔安遠二県活動份子會議總結	劉曉	12
義勇軍宣言 磐石東北人民革命軍第一軍		1	國際反帝反戰代表大會的成功與經過 (上海通訊)		13
「九一八」兩週年的滿州民族革命戰爭	羅邁	3	中央給閩浙贛省委信 (續完)		15
論蘇維埃政權的文化教育政策	洛甫	11	第34期 (1933年11月12日)		
南滿赤色游擊隊的新勝利 (滿州通訊)		18	在粵贛省第一次黨代表會議的前面	羅邁	1
給聖彼得堡委員會附設的「鬭爭委員會」信	列寧	20	粉碎五次「圍剿」與反傾向鬭爭 (續完)	海浪	6
第27期 (1933年9月25日)			[農業工会十二県查田大會總結]	劉少奇	
獻給江西省第二次黨代表大會	博古	1	[合作社怎樣工作]	亮平	
江西黨目前工作的幾個中心問題	富春	4	第35期 (1933年11月19日)		
關於江西「全省各県代表大會的總結」	羅邁	8	应当使集体農民變成小康者——在第一次全蘇聯集体農場突擊隊員大會上的演說	斯達林	1
在新的任務下福建黨應如何爭取工作的澈底轉變	寿昌	10	關於国民党油鹽公壳致各県委及白區工作部的信	中央局白區工作委員會	10
法西斯蒂在中国 (上海通訊)		13	優待紅軍的光榮模範 (上杭通訊)		13
第28期 (1933年9月30日)			蘇聯文化建設偉大的成功 (莫斯科通訊)		14
中央局關於健全赤少隊與今年舉行野營演習的決議		1	造幣廠支部通訊		16
為保證紅軍在思想上的絕對一致而鬭爭	王稼穡	4	第38期 (1933年12月12日)		
十九路軍閩的「生產大衆政權」與土地政綱	漢年	6	中国共產党中央委員會為福建事变告全国民衆		1
關於新的領導方式 (4)	洛甫	10	反对紅軍中以蕭勁光為代表的羅明路線	周恩来	3
第29期 (1933年10月7日)			把擴大紅軍的突擊到羣衆中去!	李富春	5
江西黨第二次大會代表踴躍加入紅軍——給中央局代表的号召以布爾什維克的回答 (江西省委通訊)		1	關於我們的報紙	洛甫	7
			粉碎五次「圍剿」面前臨近蘇區的白區工作 (續完)	陳雲	13
			雲集區歸隊運動的經驗		15



第40期(1933年12月26日)

中共中央局關於擴大紅軍突擊運動給各突擊隊長和各省省委指示信 1
 擴大紅軍与具体領導 5
 列寧論游擊戰爭 8
 中国經濟的和財政的破産(續完) 陽春 10
 蘇聯第二個五年計画第一年上半年計画執行
 的總結(『真理報』社論, 1933年7月22
 日。原題: 在高漲中) 向陽 14
 「坐待勝利」? 小超 16

第41期(1934年1月5日)

把革命的警覺性更加提高起來 洛甫 1
 反对擴大紅軍突擊運動中的機會主義的動搖
 民衆的敵人 凱豐 10
 列寧論游擊戰爭(續完)(『無產者』5期,
 1906年9月30日) 12
 中国經濟的和財政的破産 陽春 14
 蘇区輕騎隊的組織与工作大綱 15

第42期(1934年1月12日)

關於游擊隊工作——1月5日總政治部訓令
 總政治部 1
 關於加強游擊戰爭的領導問題 劉伯承 6
 對於經濟建設中的幾點意見 曾洪易 9
 興國長岡鄉的蘇維埃工作 毛澤東 10

第43期(1934年1月19日)

中央關於突擊月總結的決定 1
 關於優待紅軍家屬的決定 中国共產党中央委員會
 中華蘇維埃共和国人民委員會 2
 火力向着在党的緊急任務前面表示機會主義
 動搖的份子! 羅邁 4
 陳雲同志給謝紹武同志的信 陳雲 7
 勝利的瑞金突擊月(瑞金县委通訊) 10
 興國長岡鄉的蘇維埃工作(續) 毛澤東 15

第44期(1934年1月26日)

擁護蘇維埃的中国反对帝國主義的干涉(『共
 産國際』社論, 1933年10月1日) 1
 獻給第二次全国蘇維埃代表大會 洪易 4
 怎樣使蘇維埃成為更有力的動員羣衆的政權
 機關 亮平 8
 優待紅軍家屬礼拝六條例 中国共產党中央委員會
 中華蘇維埃中央人民委員會 12

「……是劉湘統一四川還是紅軍來建立四川
 蘇維埃?」 懷冰 13
 興國長岡鄉的蘇維埃工作(續完) 毛澤東 16

第45期(1934年2月2日)

中国共產党中央委員會為福建事變第二次宣
 言 中国共產党中央委員會 1
 二次全蘇大會的開幕与福建「人民」政府的
 破産 凱豐 4
 二蘇全會主席团与中共中央關於完成推銷公
 債徵收土地稅收集糧食保障紅軍給養的突
 擊運動的決定 第二次全蘇代表大會主席团
 中国共產党中央委員會 7
 為收集糧食而闘争 陳雲 9
 怎樣組織競賽? 列寧 12
 關於党委員會的工作(『國際通訊』13卷30
 期) 13
 上杭才溪鄉的蘇維埃工作 毛澤東 15

第46期(1934年2月9日)

紅軍全国政治工作會議 賀昌 1
 改善婦女中的工作! 曼奴依斯基 6
 關於新区辺区工作的意見 作霖 8
 在西北燃燒着蘇維埃烽火(陝西通訊) 拓夫 14
 上杭才溪鄉的蘇維埃工作(續) 毛澤東 15

第47期(1934年2月16日)

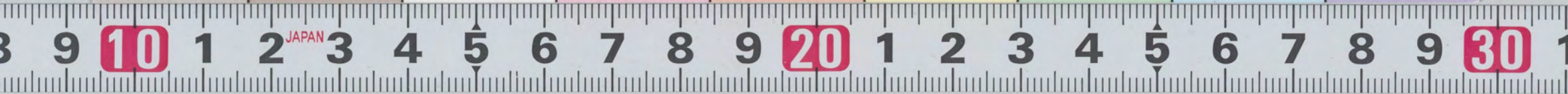
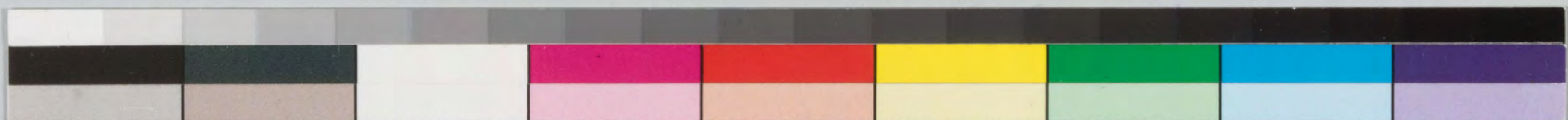
中国共產党中央政治局通知 中央政治局 1
 目前的形勢与党的任務決議——中国共產党
 五中全会通過 1
 五中全会給二次全蘇大會党团的指令 16

第48期(1934年2月23日)

中国共產党中央委員會第五次全會總結 博古 1
 論中華蘇維埃中央政府所公佈的对十九路軍
 的協定 凱豐 6
 肅清『無用的文件』(轉載江西省委通訊) 13
 怎樣組織競賽?(續完) 列寧 15
 上杭才溪鄉的蘇維埃工作(續) 毛澤東 18

第49期(1934年3月2日)

關於中央蘇区赤少隊突擊運動的決定
 中央革命軍事委員會・中共中央組織局 1
 無情的去对付我們的階級敵人 洛甫 3
 為全部完成糧食突擊計画而闘争 毛澤東 8
 唐山礦工的總罷工 少奇 13



把春耕的戰鬥任務，提到每一勞苦羣衆的面
前 亮 平 17
紀念我們的宋德金 19

第50期 (1934年3月11日)

五中全会關於白色区域中經濟闘争与工会工
作的決議 1
關於突擊運動 羅 邁 12
用突擊的方法來整理少年先鋒隊 張愛萍 18

第51期 (1934年3月17日)

把突擊運動期間党内闘争上表現出來的欠点
与錯誤糾正過來 羅 邁 1
在司偉德洛夫大学的演說 列 寧 8
一二八戰爭中閩北巷戰經驗的國際意義(『共
産國際』31期, 1932年11月1日) 庫爾特 13

第52期 (1934年3月24日)

從強迫的勞動到自由的勞動 張聞天 1
聯共十七次代表大會 戈 庭 6
奥国工人暴動的意義 定 一 10
論国民党的四中全会 孚 13
蘇区党团组织与工作条例 中央組織局 15

第53期 (1934年3月31日)

零都事件的教訓 張聞天 1
論国家工廠的管理 少 奇 5
粉碎五次『圍剿』与白軍士兵工作 拓 夫 10
〔蘇聯第二五年計画第一年的偉大成績〕

第54期 (1934年4月7日)

反对白色恐怖——共產國際執委第十三次全
会宣言 1
關於赤少隊突擊運動給各級党部的指示 中央組織局 3
用新的態度对待新的勞動 少 奇 6
春耕運動在瑞京 定 一 8
統一戰線的闘争 (『真理報』社論, 10月8
日) 15

第55期 (1934年4月14日)

共產國際執委十三次全会特刊
共產國際執委十三次全会關於共產國際執
委十三次全会的通知 共產國際執委政治書記処 1
法西主義，戰爭危險与各国共產党底任務
——共產國際執委十三次全会關於庫西
寧同志底報告所通過的提綱 2

共產國際執委十三次全会關於召集共產國
際第七次世界大会的決定 15
共產國際執委十三次全会關於共產國際執
委財政報告的決定 16

第56期 (1934年4月21日)

國際十三次全会与中国革命 社 論 1
中央關於國際十三次全会的決定 中 央 13
目前蘇維埃合作運動的狀況和我們的任務 亮 平 16
蘇維埃国家工廠支部工作条例 中央組織局 23
中央党務委員会關於陸定一同志党籍的決定 中央党務委員会 24

第57期 (1934年4月28日)

赤少隊突擊運動的總結与紅五月動員 社 論 1
紅「五一」前夜的全国無産階級偉大的戰鬥 陳 雲 9
將階級異己份子和不可靠的份子從党的組織
中肅清出去！ 羅 邁 12
重要勘誤 16

第58期 (1934年5月5日)

中共中央委員會中央人民委員會給戰地党和
蘇維埃的指示信 1
五次戰役第二步的決戰關頭和我們的任務 社 論 7
福建事變中党在福建的職工運動 陳 雲 15

第59期 (1934年5月15日)

中国共產党中央委員會為日本帝國主義佔領
華北併吞中国告全国民衆書 中国共產党中央委員會 1
現在游擊隊要解答的問題(『革命与戰爭』3
期) 劉伯承 6
中国法西斯蒂的土地政策 定 一 10
福建事變中党在福建的職工運動(續完) 陳 雲 16

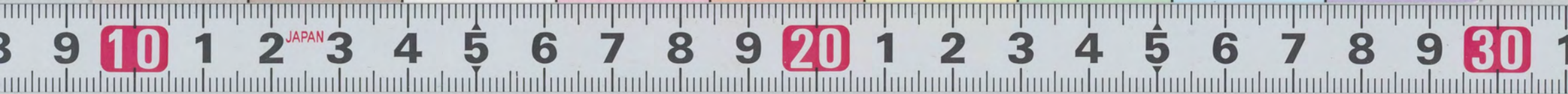
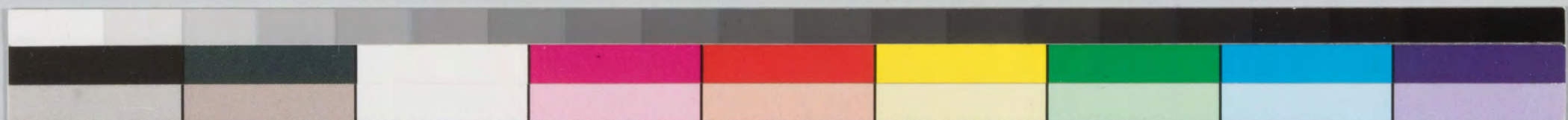
第60期 (1934年5月19日)

中共中央給各級党部党团和動員機關的信
——為三個月超過五万新的紅軍而闘争！ 中共中央 1
爭取決戰面前拏紅突擊的勝利 社 論 4
滿州反日戰爭中党的目前任務——中央給滿
州省委信 中共中央 9

第61期 (1934年5月26日)

粉碎思想闘争中平均主義的方式 羅 邁 1
把檢拳運動更广大的開展起来 董必武 3

(1) 煙 桶
一番用
で、日本
定める吸
具はこれ
です。
右図の
は全長1
さは1寸
させるの
る部分は
うな形で
穴があい
べるよう
ました。
北支で
が台湾に
るので、
持参して
ました。
(2) 匙の類
錫色を
す。
物の乗
3本置い
(3) 太い針
これも
畳針のよ
(4) ランプ
阿片を
10櫃位で
す。
(5) 阿片の
高さ3
~4櫃位
真鍮製の
のような
ので、外
花鳥や文
が彫り込
でありま
が、見事
(6) 盆
大体沢
のあるも
(7) 枕

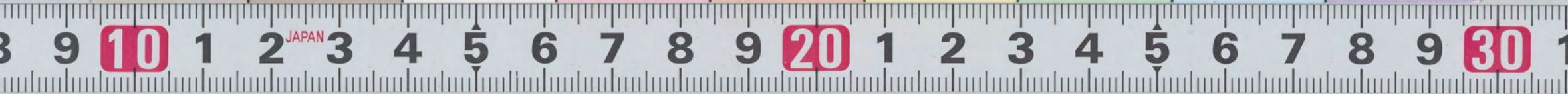


勝利県継続開展查田運動經驗	王觀瀾	9	第67期(1934年7月10日)		
反对右傾取消主義，為党的布爾什維克路線而闘争	石心	14	中共中央關於蘇区紀念「八一」的決定		1
第62期(1934年6月2日)			反对小資産階級的極左主義	張聞天	2
前進！ 向着拉紅突擊的偉大勝利！	社論	1	動員整個海陸空軍对日作戰真是「夢想」嗎？	滔天	6
党团中央為声討国民党南京政府告全国勞動羣衆書		7	滿州游擊運動(『真理報』1934年4月2日)	謝斯基	10
中央組織局給西線各県負責同志各県委動員機關和突擊隊的信	中央組織局	11	箭在弦上的日帝國主義反蘇聯戰爭	杖人	13
階級戰爭中的教育	瞿秋白	15	第68期(1934年7月21日)		
反对右傾取消主義，為党的布爾塞維克路線而闘争(続)	石心	19	爭取敵人大舉進攻面前的秋收勝利	社論	1
第63期(1934年6月9日)			应当把少先隊變為紅軍的現成的後備軍	凱豐	4
給李富春同志的信	博古	1	中国革命与欧州革命	馬克斯	7
追悼顧作霖同志	博古	5	波斯和中国(1857年5月22日作於倫敦)	恩格斯	12
這樣的工作作風好不好？	漢年	6	第69期(1934年8月4日)		
反对右傾取消主義，為党的布爾塞維克路線而闘争(2続)	石心	10	為着實現武裝民衆的民族革命戰爭，中国共產党做了什麼和將做些什麼？——博古同志在7月8日馬克斯主義研究会演講會上的演說	博古	1
第64期(1934年6月16日)			第70期(1934年8月16日)		
中央給各級党部和突擊隊指示信——継続紅五月的勝利，為爭取三個月計画在六月内完成与超過而闘争	中共中央	1	使紅軍抗日先遣隊的出動成為真正的廣大的武裝民衆民族革命戰爭的開始	社論	1
關於敵人遠近後方党的工作——給蘇区附近的游擊区域及蘇区各級党部信	中共中央白区工作部	6	模範紅軍家屬運動	王首道	6
華北事变的内幕	杖人	9	羣衆創造歷史(『真理報』社論，1933年10月)		10
武裝擁護蘇聯反对日本及一切帝國主義進攻蘇聯！	大成	12	中日戰爭中的幾個事實和教訓	克利格爾	15
美国銀価提高与中国勞苦羣衆	多才	15	第71期(1934年9月7日)		
第65期(1934年6月23日)			進一步的使赤少隊成為紅軍現成的有良好訓練的後備軍与地方部隊	社論	1
民族危機的新階段和我們的任務	社論	1	閩贛党目前的中心任務	張聞天	6
中央給閩贛戰委信	中共中央	9	第72期(1934年9月23日)		
加緊向機會主義開火！(『共產國際』33期社論，1933年11月20日)	滔天	13	游擊区域(被敵人佔領的区域)的工作方式与組織方式	陳雲	1
第66期(1934年6月30日)			發動水災旱荒闘争的提綱		6
中国共產党是中国反帝与土地革命中的唯一的領袖	王明	1	兩個政權——兩個收成	定一	12
川陝蘇区与紅四方面軍的驚人的勝利(川陝蘇区通信)	江鳥	18	第73期(1934年9月30日)		
国民党匪軍在鄂予皖大燒殺！	工農通訊社	22	瑞金党的道路，是全国蘇区党的道路(瑞金通訊)		1
重要勘誤		24	秋收糧食動員的總結	潭秋	8
			苦的承認——新的勝利	定一	13
			72期勘誤		16



第96期 (1936年 4月24日)		論斯泰哈諾夫運動	斯大林	15	
中国人民紅軍抗日先鋒軍佈告	彭德懷・毛沢東	1	第107期 (1936年 8月 2日)		
紅軍在山西	博古	2	兩広事変の教訓	洛甫	1
陝甘蘇維埃区域的經濟建設	毛沢民	11	兩個憲法草案	陸定一	13
特種經濟蕭条の第三年 (転載)		16	第108期 (1936年 8月15日)		
第104期 (1936年 7月 2日)		全国主力紅軍大会合	楊尚昆	1	
中華蘇維埃人民共和国中央政府・中国人民		沸騰着的上海抗日救国運動	涂振農	8	
紅軍革命軍事委員会為兩広出師北上抗日		英国对外政策的危機 (『真理報』)	拉賓斯基	17	
宣言	毛沢東・朱德	1	第109期 (1936年 8月25日)		
歡迎兩広出兵抗日	亮平	4	蘇聯社会主義底勝利及其世界的歴史意義		
日本帝国主義の走私		6	——共產国際第七次代表大会根拠曼努意		
為蔣介石製造独裁的「憲法草案」「国民大			斯基同志報告的決議, 1935年 8月20日通		
會選舉法」及「□□法」	亮平	7	過	2	
關於中美白銀協定		9	日本帝国主義進攻中国的現勢	亮平	9
胡適幹什麼的?	亮平	12	西班牙内戦	陸定一	21
從「防共協定」說到「防共」	凱豐	15	第110期 (1936年 9月 5日)		
第105期 (1936年 7月12日)		中国共產党致中国国民党書 中国共產党中央委員会	1		
蘇維埃中央政府对回族人民的宣言	毛沢東	1	沒有理由可以自滿——1935年11月20日在共		
蘇維埃中央政府对哥老会宣言	毛沢東	2	産国際執委主席团會議上的報告	庫西寧	10
改变中蘇区各方面政策	王明	5			
什麼叫做人民陣綫(『新群衆』 5月26日) 狄米特洛夫		9			

〔付記〕 この目録の校正を終えたあと、徳田教之：『解放』雑誌内容目録 アジア研究17 (3, 4) 昭和46年 1月：124—155 が発表された。徳田氏は解題のなかで『闘争』は『解放週刊』にひきつがれたとの推察をされている。しかし史料の取扱いについては、いかなる主観的要因をも省くべきである。二つの党機関紙誌の継続関係という面は現時点では立証されていない。 八巻佳子



中文論集內容目錄(3)

1 胡適思想批判——論文彙編	三聯書店編	北京大学歷史系教師座談會發言摘要	166
北京 1955—56 8冊	[339]	兩個人生	羅爾綱 183
第1輯		批判胡適派的考證方法	吳文祺 189
中国科学院郭沫若院長關於文化學術界		徹底肅清實驗主義在歷史學中的余毒	金陶齋 203
應開展反對資產階級錯誤思想的鬭爭		必須認清胡適考據學的反動性	張志岳 210
對光明日報記者的談話	3	檢查胡適在教育方面的反動影響和胡適	
三點建議	郭沫若 7	思想對我的影響	陳友松 216
批判胡適的反動政治思想	汪子嵩等 20	清除胡適販運的教育學說	弋 丁 226
“五四”運動前後胡適的政治面目	曾文經 36	胡適的文學觀批判	林淡秋 237
五四運動中的胡適和杜威	王若水 47	徹底摧毀反動的實驗主義的美學體系	
胡適的政治思想批判	李 達 55	周來祥·刁雲展 246	
清除胡適的反動哲學遺毒	王若水 67	五四以來胡適派怎樣歪曲了中國古典文	
胡適的實驗主義思想方法批判	任繼愈 77	學	何幹之 262
肅清學術研究中實用主義方法論的毒害	陳元暉 93	堅決肅清胡適派的反動思想在古典文學	
批判胡適反動的歷史觀	周一良 107	研究中的毒素	陳中凡 280
徹底肅清反動哲學思想實用主義的影響	楊正典 115	清除胡適反動理論在戲劇界的影響	
批判胡適哲學思想的反動實質	孫定國 126	陳丁沙·梁灝 287	
我們對於“紅樓夢”研究的初步意見		批判胡適在“五四”文學革命運動中的	
山東大學教師集體討論 179		改良主義思想	劉綬松 297
胡適反動思想給予古典文學研究的毒害	陸侃如 189	批判胡適在民間文學研究上的觀點和方	
批判胡適的資產階級唯心的學術觀點和		法	鍾敬文 310
他的思想方法	游國恩 194	“學者”——政治陰謀家	張 沛 320
批判胡適的文學觀點和治學方法	羅根沅 203	胡適是怎樣一個人	黎少岑 333
胡適的思想面貌和國故整理	李長之 213	胡適這個人	榮孟源 345
胡適思想的反動本質和它在文藝界的流		胡適是怎樣忠實地為帝國主義効勞的	徐仲勉 357
毒	蔡 儀 229	第3輯	
第2輯		胡適反動思想在政治上的表現	李 達 3
胡適思想批判	李 達 3	揭露美帝國主義奴才胡適的反動面貌	侯外廬 17
論胡適反動思想的流毒	夏康農 17	魯迅筆下的胡適	吳忠匡·江山 83
論胡適派腐朽的資產階級人生觀	胡 繩 33	論胡適政治思想的反動本質	彭柏山 94
胡適反動思想的實質	馬清健·盧婉清 51	我與胡適——從朋友到敵人	吳景超 107
論胡適底實用主義的“真理論”之反動		批判胡適在研究學術上的觀點和方法	張凌光 112
本質	羅克汀 63	實用主義批判	胡曲園 123
從實用主義到改良主義	王若水 69	批判胡適的所謂“科學試驗室的態度”	
兩點批判，一點反省	賀 麟 89	與“歷史的態度”	羅克汀 132
胡適實用主義哲學的反革命性和反科學		斥胡適對“儒林外史”的誣蔑	王 璜 145
性	艾思奇 105	保衛我們珍貴的文學遺產	王文琛 149
批判胡適所謂“科學的方法”及其他	詹安泰 122	胡適是怎樣歪曲和污蔑“水滸”的	何家槐 155
批判胡適的“不朽”論	王慶淑 132	胡適在對待我國文化傳統中的帝國主義	
實用主義者詹姆士的反動唯心觀點	葛 力 140	奴才面目	何 鵬 166
胡適唯心論觀點在史學中的流毒	嵇文甫 155	胡適在戲劇文學方面反動的唯心觀點	顏振奮 180
批判胡適主觀唯心論的歷史觀與方法論——		胡適派文學思想批判	王元化 191

考える。
下層統
にのみ
コレタ
「書簡」
徳4)。
志的信
] 21,
民地部
るコミ
」(外
「鬭争」
起によ
際反戦
9月30
とする
(波多
の総結
掲、「植
為日本
「鬭争」
籌備会
「資料集
日救国
陸・海
の武装、
庫の収
、(5)労
民族武装
敵との
民国54)。

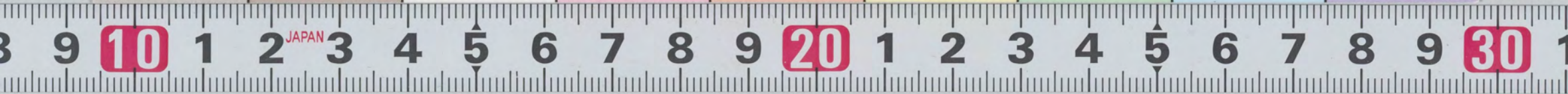
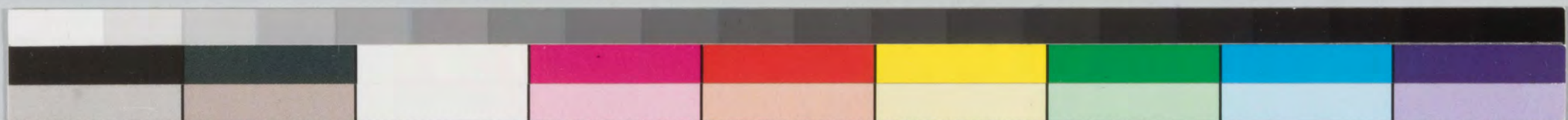


肅清胡適在文芸學上的反動思想	樓 棲 204	胡適研究古典文學的方法及其惡劣影響	鮑正鵠 248
“老殘遊記”的反動性和胡適在“老殘遊記”評價中所表現的反動政治立場	張畢來 217	胡適在新文學運動上作用的重新估價	鍾敬文 256
批判胡適的“國語文法概論”	黃漢生 239	胡適的“歷史癖”的實質是什麼？	王崇武 273
批判胡適的實驗主義“考拋學”	童書業 248	論英雄創造歷史的唯心主義歷史觀	蔡尚思 278
胡適的治學方法和其反動本質	金心熙 258	肅清胡適在中學國文教學中的反動影響	李沢深 287
論人民羣衆和個人在歷史上的作用	沙 英 268	對批判胡適派主觀唯心主義思想的一點體會	吳徵鎰 293
批判胡適的反動歷史觀點	張繼安 282	第5輯	
批判實驗主義教育學	曹 孚 292	實用主義的“科學”方法是徹頭徹尾的詭弁	何思敬 3
胡適反動思想對我的影響	鄭林莊 333	胡適實用主義的唯我論與虛構論的反動本質	全增嘏 18
肅清胡適反動思想在教育上的影響	毛禮銳 339	胡適怎樣利用宗教	王雨田 25
杜威的反動思想在心理學上所表現的兩個例子	陳 書 346	實用主義——客觀真理的死敵	章世鴻 36
肅清胡適派資產階級唯心論觀點對教學工作的毒害	楊招棣 350	論胡適派反動的資產階級的哲學史觀點和方法	汪 毅 48
第4輯		馬克思主義唯物論和實用主義唯心論的根本對立	夏甄陶 70
學習弁証唯物主義和歷史唯物主義	郭沫若 3	中國共產黨成立前後馬克思主義者如何和胡適的反動政治主張作鬭爭	許世華 79
反對資產階級唯心主義的重大意義	潘梓年 6	胡適在抗日戰爭前夕是怎樣媚外和幫兇的	北 中 85
魯迅和瞿秋白筆下的胡適	姚 虹 15	徹底清除胡適反動思想對歷史學的影響——天津市史學界批判胡適反動史學觀點與方法論座談會紀錄摘要	93
胡適的反動思想的階級本質	江柱·綠藜 29	胡適對待祖國歷史的奴才思想	白壽彝 111
實用主義的政治思想的反動本質	高一涵 38	胡適“白話文學史”批判	李長之 127
胡適派所謂民主政治的反動的實質	黎 澍 43	評胡適所謂“老杜的特別風趣”	郭預衡 144
胡適，杜威，羅素是怎樣開始破壞中國的新文化運動的？	陰法魯 57	批判胡適的反動文學思想——形式主義與自然主義	王 瑤 151
實用主義的葫蘆裏裝的是什麼藥？	夏 澍 68	胡適的反動文學思想批判	黃葉眠 169
唯心主義是科學的敵人	胡 繩 81	胡適教育思想的錯誤及其在教育學上的影響	潘懋元 199
肅清科學研究工作中胡適思想方法的流毒	任繼愈 101	我控訴杜威這個大騙子	陳鶴琴 213
批判胡適實用主義思想方法底偽科學性	葛 力 118	批判杜威教育思想中的“民主主義”概念	劉付忱 219
實用主義批判	周谷城 148	胡適是怎樣販運杜威教育思想的	韓 落 226
批判胡適的思想方法	賀 麟 155	實用主義的反動的教育目的論	孟憲承 233
胡適——真理的敵人	黃桐森 164	第6輯	
什麼叫做實用主義？	喬 彬 170	徹底批判胡適派資產階級唯心主義思想是貫徹祖國過渡時期總任務的一個嚴重問題	潘梓年 3
什麼叫做主觀唯心論？為什麼說實用主義就是主觀唯心論	喬 彬 175	實用主義——最陳腐，最反動的主觀唯心論	馬 特 24
什麼是“世界主義”？	羅克汀 179	批判胡適的庸俗進化論	葛懋春·龐樸 50
什麼是達爾文進化論？為什麼說胡適實用主義不是科學的進化論，而是庸俗進化論？	喬 彬 183	實用主義的生物學上的根柢到底是什	
“批判胡適的實用主義”一文的修改說明	艾思奇 188		
胡適的“嘗試集”批判	林 彥 192		
胡適是怎樣毀中國戲曲遺產的	王文琛 202		
充滿毒素的“白話文學史”	譚丕模 207		
胡適對於吳敬梓和“儒林外史”的誣蔑	何家槐 215		
胡適的反動哲學觀與文學觀的一致性	徐之夢 223		
清除胡適反動的文學思想	張緒榮 234		

Oct. 1
 ①『
 理
 前
 ②『
 繪
 与
 82
 同
 公
 る
 て
 193
 ③H.
 は、
 と
 (48)
 (49) 同
 (50) 同
 (51) 同
 日
 て
 る
 戒
 「福
 福州
 政
 發展
 さ
 福建
 優先
 削除
 式に
 治
 総
 か
 時、
 4百
 9割
 頁)。
 (52)
 1933年
 (53) 日
 洋
 (54) 万
 きた
 路軍



麼?	楊鍾健	67	批判胡適反動實驗主義的歷史考掘學	李光璧	31
哲學史與政治	馮友蘭	81	論胡適在禪宗史研究中的謬誤	任繼愈	43
胡適四十年來反動政治思想的批判	鄭鶴聲	99	斥胡適對偉大的史學家司馬遷的誣毀	麥若鵬	63
胡適——愛國學生運動的死敵			批判胡適關於憲法問題的胡說	張晉藩	69
	蕭超然·周家本·李慶聰	130	從“白話文學史”中看胡適對語言的見解的反動本質	韓允符	78
批判胡適派為封建買辦統治服務的“民主自由”論	胡華	138	論考掘學在文學研究中的作用——兼評胡適的資產階級唯心主義考掘學及其毒害	陳煒謨	97
批判胡適的“井田弁”及其他	孫力行	160	批判胡適研究歌謠的錯誤觀點和方法	趙衛邦	143
批判胡適的實驗主義“史學”方法	童書業	168	胡適對中國文學史“公例”的歪曲捏造及其影響	余冠英	151
批判胡適的考掘方法	高亨	190	胡適“誣楚辭”批判	孟志孫	166
批判胡適反動的考掘方法和校勘方法	趙儷生	206	附錄		
批判考古學中的胡適派資產階級思想	夏鼐	217	自然主義是胡適反動文學思想的主要傾向嗎	毛星	176
胡適怎樣歪曲了中國古典文學	韓文佑	226	批判胡適唯心主義語言學思想	張清常	193
胡適在“五四”文學革命中做了些什麼?	以羣	236	批判胡適的“文法的研究法”	馬國藩	234
胡適文學史觀批判	褚斌傑	254	肅清胡適在教育上所散佈的反動“自由”思想的毒害	邵鶴亭	247
胡適文學史觀點批判	何其芳	268	批判和肅清胡適的反動教育思想	楊榮春	256
第7輯			2 胡適思想批判——論文選集	三聯書店編	
批判胡適實用主義哲學	金岳霖等	3	北京 1959 340 P.	[5823]	
批判實用主義者杜威的世界觀	金岳霖	26	唯心主義是科學的敵人	胡繩	1
從對待哲學遺產的觀點方法和立場批判			胡適實用主義哲學的反革命性和反科學性	艾思奇	22
胡適怎樣塗抹和誣毀中國哲學史	侯外廬	59	批判實用主義者的世界觀	金岳霖	40
批判胡適“中國哲學史大綱”底實用主義觀點和方法	馮友蘭·朱伯崑	93	批判胡適實用主義真理論	孫定國	74
批判反動的與反科學的實用主義心理學	高覺敷	119	批判實用主義者的庸俗進化論	楊鍾健	92
清算胡適的反動政治思想	孫思白等	134	清除胡適的反動哲學遺毒	王若水	106
胡適的“獨立評論”的剖析	張俊彥等	175	看看胡適的“歷史的態度”和“科學的方法”	范文瀾	115
西洋“漢學”與胡適	周一良	198	批判胡適的多元歷史觀	嵇文甫	147
清除胡適思想在歷史考掘中的惡劣影響	田余慶	214	從對待哲學遺產的觀點方法和立場批判		
批判胡適的實用主義歷史唯心論	袁良義	237	胡適怎樣塗抹和誣蔑中國哲學史	侯外廬	158
批判實用主義反動的唯心史觀	王慶淑等	255	批判胡適的“戴東原的哲學”	陳玉森	195
看看胡適的“歷史的態度”和“科學的方法”	范文瀾	269	論胡適在禪宗史研究中的謬誤	任繼愈	228
批判胡適所謂“文學改良”的幾個論點	戴錫齡	302	胡適文學史觀點批判	何其芳	248
清除胡適反動思想對祖國古典文學遺產的毒害	詹安泰	319	胡適對中國文學史“公例”的歪曲捏造及其影響	余冠英	283
批判胡適的“西遊記考証”	馮沅君	332	胡適教育思想的錯誤及其在教育學上的影響	潘懋元	299
古典文學研究中胡適怎樣歪曲文學的社會意義	胡念貽	344	胡適派所謂民主政治的反動的實質	黎澍	313
批判胡適誇大他個人在新文學運動中的作用	曹道衡	370	胡適反動思想在政治上的表現	李達	327
關胡適的所謂“歷史進化的文學觀念”	王璠	390			
批判胡適的“吾我篇”和“爾汝篇”	潘允中	408			
第8輯					
對胡適的疑古論的批判	丁則良	3			
批判胡適的多元歷史觀	嵇文甫	21			



3 資産階級教育思想批判 文化教育出版社編
北京 1955 215 P. [2076]

第1集

批判唯心主義思想的重大意義“人民教育” 社論 5

列寧反对主觀唯心主義的鬭争及其对科学の心理学与教育学的意義 彼得魯舍夫斯基 12

批判實驗主義教育学 曹 孚 65

实用主義教育学的反動實質何在 張騰霄 116

批判胡適反動的教育思想 劉松濤 131

胡適是怎樣販運杜威教育思想的 韓 落 149

清除胡適反動思想在我国教育界中的遺毒 華南師範学院教育系教授集体討論 158

肅清胡適反動思想在教育上的影響 毛礼銳 165

实用主義的反動的教育目的論 孟憲承 173

我中了杜威实用主義反動教育思想的三槍 陳鶴琴 178

檢查胡適在教育方面的反動影響和胡適思想对我的影響 陳友松 185

批判反動的与反科学的实用主義心理学 高覺敷 197

4 梁漱溟思想批判 三聯書店編
北京 1955 2冊 [1090]

第1輯

批判梁漱溟先生的文化觀和“村治”理論 馮友蘭 3

批判梁漱溟的鄉村建設理論 吳景超 11

梁漱溟对帝國主義採取甚麼態度 徐宗勉 30

批判梁漱溟堅持中国落後反对工業化的謬論 千家駒 41

梁漱溟的鄉村建設運動究竟為誰服務? 千家駒 49

批判梁漱溟的“鄉村建設運動” 袁 方 57

梁漱溟和他的反動思想 曉 亮 72

駁斥梁漱溟的“職業分途”的反動理論 孫定国 80

批判梁漱溟的直覺主義 賀 麟 95

揭穿梁漱溟的文化觀點的買辦性 任繼愈 114

揭露梁漱溟的唯心主義的世界觀 葛 力 123

批判梁漱溟的反動的世界觀 孫定国 133

批判梁漱溟先生的文化觀 朱伯崑 145

批判梁漱溟的反動教育思想 鄒魯風等 166

第2輯

批判梁漱溟的生命主義哲学 湯用彤・任繼愈 3

梁漱溟的“理論”是極端唯心主義的 潘梓年 12

向梁漱溟的反動思想展開鬭争 任繼愈 19

批判梁漱溟的反動的歷史觀點 吳廷璆 30

批判梁漱溟關於印度文化和哲学的謬論 金克木 50

梁漱溟是怎樣向馬克思主義進攻的 胡慶鈞 67

批判梁漱溟的中国文化論 吳景超 86

梁漱溟怎樣宣傳反動唯心哲学 周輔成 106

梁漱溟所謂“理性”是甚麼? 王若水 123

批判梁漱溟的主觀唯心論哲学思想 鍾宇人 138

評一九三〇年梁漱溟和胡適的“争論” 汪子嵩・朱伯崑 148

梁漱溟的四十年 李紫翔 156

批判梁漱溟關於階級鬭争問題的反動觀點 沙 英 169

批判梁漱溟否認階級和階級鬭争的反動觀點 何汝璧 187

揭穿梁漱溟的反動本質 何思源 198

梁漱溟的反動理論是為誰服務的? 何炳然 210

批判梁漱溟關於中国革命是“從外引發”的謬論 高 放 218

5 胡風文芸思想批判論文彙集 作家出版社編輯部編
北京 作家出版社 1955 5冊 [630]

1集

前言 1

論約瑟夫的外套 黄葉眠 1

讀了『文芸工作底發展及其努力方向』以後 黄葉眠 19

今天這大半個旧中国的文芸上的中心問題到底在哪裏? 何其芳 35

文芸創作与主觀 喬冠華 42

論主觀問題 荃 麟 63

評路翎的短篇小說 胡 繩 96

魯迅思想發展的道路 胡 繩 116

個性解放与集体主義 默 涵 136

2集

在反動派压迫下鬭争和發展的革命文芸 茅 盾 1

『關於現實主義』的序 何其芳 22

胡風的反馬克思主義的文芸思想 林默涵 49

現實主義的路，還是反現實主義的路? 何其芳 69

論文芸与政治的關係 陳 涌 93

反对歪曲和偽造馬列主義 史 篤 101

從頭學習『在延安文芸座談会上的講話』 舒 蕪 108

致路翎的公開信 舒 蕪 115

3集

我們必須鬭争 周 揚 1

胡風先生的立場是什麼 周姬昌 23

我們必和胡風的文芸思想画清界限 鮑 昌 33

背後的射擊 天 藍 46

Oct. 1955

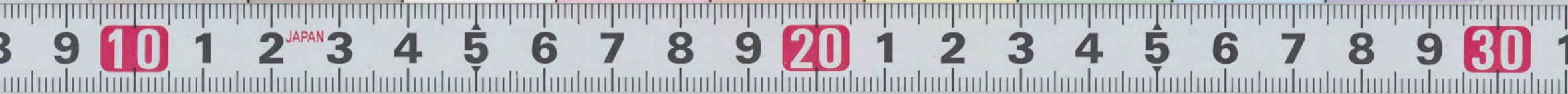
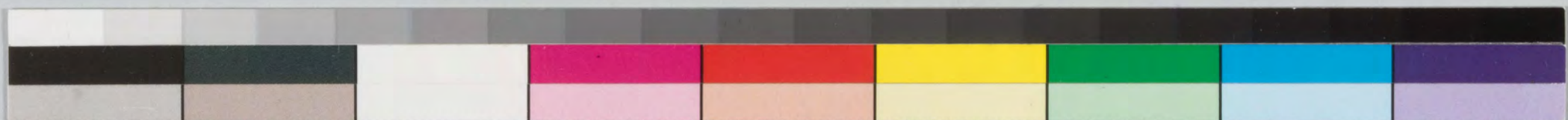
会議にお
の最も
にうち
服し、
法も知
行った。
化を分
理論的
建事変
ていた
革命に
まれた
への影
府自体

以上、
てきた。
それは
を検討
しかし、
生した
な支援
くとも
ではない
せ、か
いずれ
術では、
われる。
条件に
ったか
る。そ
手と同
戦線と

注
(1) 版部、
(2) 何
何草
出版社
胡
出版
岩
95頁。
(3) 不



分清是非, 画清界限!	姚文元	56	批判胡風哲学思想上的主觀唯心論	鮑昌	77
胡風先生及其小集團曾經怎樣鬭爭過?	王智亮	63	分岐在哪裏?	韋君宜	92
阿龍的『馬克思主義追求』	王速	70	共產主義世界觀——作家的眼睛	李蕤	104
批判胡風的資產階級唯心論文藝思想	蔡儀	76	批判胡風的資產階級唯心論的文藝思想	杜埃	116
從胡風的創作看他的理論的破產	袁水拍	100	在反『拉普』派旗幟下的胡風真面目	熊復	124
胡風的歧路	黃源	123	胡風的『意見書』是胡風反黨思想的明証	吳強	142
箭頭指向哪裏?	田間	133	這叫做『異口同聲』	伯約	153
反馬克思主義的胡風文藝思想	舒蕪	147	學習會干擾創作情緒麼?	羅蓀	155
談胡風先生的『五把刀子』	黃秋雲	165	胡風的『自我批評』	羅蓀	159
不能按照胡風的『面貌』來改造我們的文藝運動	王瑤	178	在『蒼蠅』上碰了頭	唐弢	164
從報刊工作的角度揭露胡風的『文學運動的方式』的實質	李龍牧	183	『真誠』, 『虛偽』及其它	于晴	167
『宗派主義』在哪裏?	羅蓀	198	胡風的『党性』與『良心』	徐中玉	174
真實的意圖在哪裏?	何為	205			
4集			6 肅清胡風黑幫反革命文學作品的毒害	中國青年出版社編	
必須徹底地全面地展開對胡風文藝思想的批判	茅盾	1	北京 1954 88 P.	[8585]	
論胡風的『一個基本問題』	秦兆陽	12	路翎的反革命的小說創作	康濯	1
評胡風的『有關現實主義的一個基本問題』	王速	39	認清“窪地上的“戰役””的反革命本質	陳涌	17
什麼是胡風的『現實主義』	俞林	68	胡風反革命集團底“詩”的實質	臧克家	27
胡風的反馬克思主義的立場觀點	王元化	83	魯藜的反革命詩歌	蔡群	44
胡風對待『思想改造』的真正態度是什麼?	江柱·綠黎	99	綠原在“作品”中所表現的法西斯思想	力揚	60
胡風怎樣歪曲和取消文藝的党性原則	敏沢	111	胡風所寫“和新人物在一起”的反動毒害	孟凡	72
胡風在文學傳統問題上的反馬克思主義觀點	李希凡·藍翎	124			
關於胡風在民族文藝遺產問題上的錯誤的兩點批判	鮑昌	145	7 一切愛國青年起來, 投入肅清暗藏敵人的戰鬪	中國青年出版社編	
批判胡風對祖國文學遺產的虛無主義態度	曹道衡	153	北京 1955 46 P.	[7277]	
胡風是這樣看待民族戲劇遺產的	馬少波	159	一切愛國青年起來, 投入肅清暗藏敵人的戰鬪	“中國青年報”社論	1
胡風先生在說謊	曹禺	166	胡風反革命集團是青年最陰險的敵人	劉導生	4
抗議胡風對中央戲劇學院的誣蔑	歐陽予倩	172	把憤怒變成堅決的行動	劉導生	8
事實不容捏造	吳雪	174	一貫反革命的胡風	何家槐	10
胡風先生下錯了斷語	劉滄浪	182	胡風反革命集團在各地的罪行	“工人日報”資料組編	25
胡風的文藝思想給我的毒害	陶琬	187	我控訴胡風	胡滲	37
			肅清胡風分子散佈的毒素	張錦芳	41
			控訴反黨分子曾卓對我的毒害	李柯	43
5集			8 關於胡風反革命集團的材料	“人民日報”編輯部編	
為什麼要批判胡適, 俞平伯, 胡風的思想?	胡繩	1	北京 人民出版社 1955 128 P.	[7279]	
胡風的唯心主義世界觀	邵荃麟	20	序言	“人民日報”編輯部	1
論胡風的『主觀戰鬪精神』	黃藥眠	32	一九五五年五月十三日“人民日報”的編者按語		5
胡風是馬克思主義的實踐者呢, 還是馬克思主義的反对者?	楊耳	48			
馬克思主義還是反馬克思主義?	姚文元	62			



關於胡風反革命集團的一些材料	舒 蕪 7	再接再厲，揭露胡風	李霽野 66
附錄：我的自我批判	胡 風 23	這是個革命同反革命的鬭爭	張天翼 67
關於胡風反革命集團的第二批材料	47	胡風騙不了人	沙 汀 69
關於胡風反革命集團的第三批材料	88	個人野心家永遠是我們的敵人	焦菊隱 71
必須從胡風事件吸取教訓（一九五五年六月十日“人民日報”社論）	126	胡風——陰謀家	田 間 73
		不讓胡風再混在我們中間為害	陳望道 74
		胡風——反革命的灰色蛇	侯外廬 75
		徹底粉碎胡風的反黨集團	沈志遠 79
		胡風到底算幹甚麼的	陳 沂 81
		徹底粉碎胡風反黨集團	柯仲平 88
		敵人在哪裏	丁 玲 89
		胡風集團的惡行	魏金枝 92
		胡風必須低頭認罪	盧于道 96
		我看出了胡風的陰謀	冰 心 98
		把“加官臉子”摘下來	李少春 100
		認清了胡風的真面目	陶孟和 101
		我的憤怒和抗議	柯 瑣 103
		徹底揭露和清算胡風的反動罪行	許德珩 104
		主張所謂“主觀戰鬭精神”和“自我擴張”者的供狀	王統照 107
		偽裝心當剝去！	馮乃超 108
		必須徹底打垮胡風反黨集團	巴 金 111
		揭開兩面派的醜惡面目	周鋼鳴 116
		討伐胡風	康 濯 120
		要揭露胡風的反黨面目	馬 加 123
		我們要警惕	馬 烽 127
		徹底打垮胡風集團	瑪拉沁夫 129
		繳下胡風的“劍”！	高玉宝 130
		杜絕敵人可以利用的任何空隙	吳 雪 132
		從天津文協主編的“文芸學習”來看胡風反黨集團的“文運”和“前途”	鄒 明 135
		要向胡風派算賬	艾文會 140
		徹底搞清它，堅決粉碎它！	金仲華 142
		堅決挖出胡風反革命集團的老根	靳 以 144
		胡風，你的主子是誰？	曹 禺 147
		擁護全國文聯和作家協會清除反革命分子胡風的決議	程硯秋 151
		嚴厲制裁反革命分子——胡風	朱學範 153
		清算胡風反黨反人民的罪行	裴文中·賈蘭坡·周明鎮 155
		胡風是一個甚麼樣的敵人？	鄭律成 156
		反革命的打手——方然	金 蘿 158
		我們絕對不能容忍！	陳 垣 161
		革命事業的勝利	袁翰青 163
		把胡風清除出去	馬哲民 164
		必須嚴肅處理反革命分子胡風	黃琪翔 165

9 堅決，徹底，乾淨，全部地肅清一切反革命分子			
中國共產主義青年團北京市委員會宣傳部編			
北京 北京大眾出版社 1955 71 P. [9794]			
必須從胡風事件吸取教訓	人民日報社論 1		
提高警惕，反對麻痺	羅瑞卿 4		
全國人民團結起來，堅決，徹底，乾淨，全部地肅清一切反革命分子	羅瑞卿 13		
擦亮眼睛，清查敵人	29		
提高覺悟，提高警惕——從侯紅鵝事件			
中應該吸取的教訓	中國青年報社論 36		
侯紅鵝被拖進了反革命的泥坑！			
	中國青年報記者 40		
某機關有這樣一位青年	馬鐵丁 49		
林姿榮是怎樣變成反革命罪犯的	朱 燧 57		
到處都有人民的偵察兵	崔世傑 63		
智擒慣匪	東丹·樹喬 65		
不讓一個反革命分子漏網	鄭兆南 68		
10 堅決徹底粉碎胡風反革命集團（1）	人民出版社編		
北京 1955 328 P. [9350]			
1.			
中國文學藝術界聯合會主席團，中國作家協會主席團舉行聯席擴大會議聲討胡風反革命集團	7		
中國文學藝術界聯合會主席團，中國作家協會主席團聯席擴大會議決議會議上的一部分發言	9		
把暗藏的反革命清洗出去	光明日報社論 39		
徹底粉碎胡風反黨集團的罪惡陰謀	工人日報社論 42		
徹底清算胡風反黨集團的罪行	中國青年報社論 46		
粉碎胡風的蛇窩，提高革命的警惕	大公報社論 49		
2.			
請依法處理胡風	郭沫若 55		
揭下胡風派的騙人的外衣	茅以昇 56		
必須揭穿胡風的反動面目	王 康 58		
看穿了胡風的心	老 舍 63		
不能讓胡風再欺騙下去了	許 傑 64		



擁護文聯，作家協會的決議	葉恭綽 166	全國總工會主席賴若愚的講話(摘要)	260
我們與反革命分子胡風誓不兩立	朱順余等 167	堅決鎮壓胡風反革命集團的陰謀活動	張志和 264
徹底粉碎胡風集團的反革命活動	游國恩 169	不能讓耗子過街	施今墨 266
肅清陰險的反革命分子	豐子愷 171	揭露胡風反革命集團骨幹分子謝韜的罪行	雲光 266
我的憤怒已達極點	趙丹 172	3.	
繼續追查胡風集團的反革命罪行	丁西林 173	工農群眾要求堅決打垮胡風集團	273
徹底清除胡風集團	羅常培 174	戰士們要求挖掉反革命堡壘	279
趕快從人民隊伍中清除胡風	林巧稚 175	學校師生聲討胡風集團的罪行	287
婦女們，堅決與胡風反動集團鬥爭到底	趙先等 176	機關，團體，企業工作人員要求嚴懲胡風	299
剝去反黨陰謀家胡風的假面目	熊復 177	文藝界擁護把胡風清除出去	310
打蛇，是為了對人民的愛	曹靖華 186	一定要追查胡風反革命活動的政治背景	318
暗藏的狼	楚因南 187	提高警惕，保衛社會主義革命事業	325
假面具是騙不了人的！	納·賽音朝克因 189	11 評華崗的“弁証唯物論大綱”	上海人民出版社編 [8055]
卑劣的騙子	李喬 190	上海 1956 104 P.	
這是什麼樣的“自我批判”？	李弘奎 191	評華崗的“弁証唯物論大綱”	高青海 1
嚴懲胡風	馬彥祥 192	評華崗的“弁証唯物論大綱”	丁偉志·李學昆·高禹 32
剷滅隱蔽的“地下軍”	王震之 193	批判華崗的“弁証唯物論大綱”	山東大學弁証唯物主義與歷史唯物主義教研組 49
提高警惕，揭穿胡風反革命的陰謀	田華 195	12 評馬寅初著“我的經濟理論哲學思想和政治立場”論文集	財政出版社編 [2560]
我們接觸到的胡風反黨集團的材料	文藝報編輯部整理 196	北京 1958 130 P.	
胡風反黨集團在新文藝出版社幹了些什麼？	峻明 205	就綜合平衡理論與馬寅初先生商榷	馬紀孔·鍾契夫 5
堅決反對胡風集團的罪行	翦伯贊 214	評馬寅初先生的綜合平衡理論	葉景哲·陳立國·閔其學 18
胡風和胡適“異曲同工”	馮友蘭 215	關於馬寅初先生的綜合平衡理論	柳谷崗·一禾·梁文森 38
絕不容許胡風繼續欺騙人民	錢偉長 217	“團團轉的聯系”不是唯物弁証法	韓佳辰 44
重要的教訓	李伯釗 218	“按團團轉的比例發展規律”是反弁証唯物主義的	李立中 57
揭露胡風的罪行	何家槐 221	我國人口和就業問題	叔仲 62
揭露劉雪葦在上海文藝界中的反黨活動	柯藍 223	人多是好事——評馬寅初的“新人口論”	民子 73
胡風——蛀牆腳的白蟻	馬思聰 228	馬寅初先生究竟屬於哪一個馬家	陳京璇·諸葛殷同 84
把胡風分子張禹清洗出去	謝竟成等 229	評馬寅初先生著作中關於凱恩斯理論部分	項沖 90
堅決鎮壓胡風	常香玉 230	評馬寅初先生的“我的經濟理論哲學思想和政治立場”	戴園晨 101
制裁反革命分子胡風	郝建秀等 232	附錄：再談我的平衡論中的“團團轉”理論	馬寅初 118
我們要控訴！	曹振武 233		
“敵人不投降，就消滅他！”	于伶 237		
必須徹底粉碎胡風反革命集團	宋雲彬 239		
蘆甸應該徹底交待	羊羣 240		
嚴辦陰謀鬼！	連瀾如 242		
胡風——我們各階層人民的共同敵人	樂松生 243		
胡風反革命集團是青年最陰險的敵人	劉導生 244		
披着人皮的豺狼	蔡楚生 248		
追查胡風反革命集團的底細	阮章競 251		
徹底查清胡風集團的罪行	張曉梅 255		
工商界人士應該警惕	王光英 256		
我們必須積極參加粉碎胡風反革命集團的鬥爭	張修竹 257		
一個女工的憤怒和控訴	金雲 259		

エト政
体的な
ソヴィ
後から解
前、すで
る報告
命政府と
きない、
に開かれ
ることを
したのは、
唇だけで
変に關す
福建事変
が、毛
の本意で
政府の崩
況下でな
たのでは
中央の見
難にした

の中間勢
國共產党
関する党
衆の動員
同様の觀
らの文書
締結に疑
單に欺瞞
有効な行
央の博古
あるが、
との統一
裏に導く
中央は協
よび十九
のだから。

策の基本
統一戦線

格はソヴ
反日闘争
よる民族
組織方針



13 彭德懷	中国問題研究中心編 香港 自聯出版社 1969 200 P. 函版 [9757]	序 司馬璐 1	向反党反社会主義的黑綫開火 高 炬 1
1. 彭德懷的伝略与「平江起義」		彭德懷伝略 豐之余 5	擦亮眼睛，弁別真假 何 明 6
2. 彭德懷在中共建軍問題上的意見		平江起義前後記略 鍾期光 8	鄧拓的《燕山夜話》是反党反社会主義 的黑話 林杰等編 10
3. 彭德懷在廬山會議前後的意見		在中國共產党第八次全國代表大會上的 發言 彭德懷 17	15 周谷城批判問題彙編 ——輯自一九六四至六五年全年 上海文滙報 楊開書報供应社編 香港 2冊 [9312]
4. 中共清算彭德懷的文件与評論		建設強大的現代化軍隊，保衛祖國和平 建設 彭德懷 40	上輯 周谷城的“無差別境界”論及其來龍去 脉 司徒杰 3
5. 紅衛兵報刊中的彭德懷		彭德懷在廬山會議西北小組會議上的發 言摘錄 53	周谷城頌揚“重商主義”的實質是什麼 陳有鏘等 20
6. 中共回憶錄中的彭德懷		彭德懷在廬山會議後給毛澤東的「意見書」 58	現實生活中根本不存在什麼“無差別境 界” 裔式娟 31
7. 「保衛延安」一書裏的彭德懷		彭德懷在中共八屆八中全會上的發言摘 錄 65	什麼是周谷城所謂的《全人格》？ 稷 与 37
14 向反党反社会主義的黑綫開火	北京出版社編 北京 1966 30 P. [7542]	八屆八中全會後彭德懷給毛澤東的信 72	評周谷城先生的“生存競争”歷史觀 楊 寬 43
		從彭德懷的失敗到中國赫魯曉夫的破產 紅旗雜誌社論 81	周谷城“真實感情”說的反動實質 陳伝才・鄭国銓 61
		高舉毛澤東思想偉大紅旗徹底批判資產 階級軍事路線 解放軍報社論 88	評周谷城“時代精神滙合論”的階級實 質 公今度・章培恒 71
		彭德懷及其後台罪責難逃 人民日報社論 91	什麼是周谷城的生活的“重心”？ 稷 与 85
		徹底清算彭德懷篡軍反党的滔天罪行 黎新功 95	周谷城在「世界歷史」第三冊中是怎樣 美化殖民主義的 醒 吾 90
			同帝國主義能《合作》嗎？ 婁才宝 99
			周谷城是怎樣袒護秦檜，贊成投降，詆 毀主戰派的 金志熙 105
			為什麼要替秦檜翻案？ 羅思鼎 113
			下輯 什麼是時代精神？——金為民，李云初 「關於時代精神的幾點疑問」解剖 湯大民・邢慶祥 3
			關於時代精神的幾點疑問——与姚文元 同志商榷 金為民・李云初 17
			時代精神与英雄形像的塑造 吳中杰 23
			要塑造怎樣的當代英雄形像？——關於 “真實”維護者的真實面目的剖析 張 炯 33
			略論不同歷史時期時代精神的客觀表現 江文軍 49
			不許歪曲弁証法——駁周谷城等在時代 精神問題上的反弁証法觀點 葉秀山 64
			分歧的實質是什麼？——評「關於時代 精神的幾點疑問」 吳立昌・戴厚英・高云 79
			中国人民大学語文系舉行關於時代精神 問題討論 97
			周谷城“斷而相統論”的由来 史 丁 103
			看戲能進入“無差別境界”嗎？ 鄧志臣 107

たる介
涉の意
府が財
時にも
なけれ
について
を避け
府へ送
日本
針を發
保護す
に加わ
の噂が
いた(52)
任した
そして
目が華
また、
米の角
して親
た(55)
おいて
態を悪
しか
はない
たから
日本政
はでき
かつ福
ないか
と意図
かくし
ところ
って、
当初掲
で国民
ヴィエ
要請を
った(58)
いては
かった
者たち
える。後
関係を
その可能



藝術欣賞中不能排除思想的作用	劉綱紀	111	「海瑞罷官」的本質	劉大杰	11
周谷城想把文芸引向什麼軌道	陳繼光	116	從「抑制豪強」看海瑞執法的實質	曾炳鈞	21
16 吳晗批判全集 ——輯自一九六五年至六六年全年上海			為什麼吹捧海瑞修治吳淞江？	顏恢	27
文滙報 楊開書報供應社編			評吳晗為海瑞爭光	董家麟	37
香港 8冊		[9358]	蘇松地區階級鬭爭的歷史不容歪曲	蔡少卿	41
第1輯			吳晗的一付地主老爺面孔	黃世瑜	55
關於「海瑞罷官」的自我批判	吳 晗	3	折穿「退田」的西洋鏡	羅思鼎	55
評吳晗同志所謂「自我批評」	楊 寬	35	關於「幾個疑問」的疑問	孫光萱	61
吳晗的反動創作動機必須批判	江俊峰	47	在重要歷史關頭吳晗跟什麼人站在一		
上海學術界部份人士座談吳晗的『關於			起？	艾錦泉	67
「海瑞罷官」的自我批評』		55	吳晗的媚骨，傲骨和反骨	李国安	70
吳晗投靠胡適的鐵証——一九三〇年至			海瑞不佞	犢 奔	73
一九三二年吳晗和胡適的來往信件		73	海瑞的改良適合時代潮流	張延學	74
請看吳晗解放前站穩了什麼立場	申而勇	105	揭開掩蓋真正錯誤的烟幕	吳蔭循	76
第2輯			把是非顛倒了	華向陽	78
論海瑞	吳 晗	3	“青天大老爺”真能“為民作主”嗎？	李春元·陳匡時·徐連達	79
海瑞的故事	吳 晗	29	不要鋤掉「海瑞罷官」這朵花	王鴻德	92
用革命的弁証法徹底批判反黨反社會主			讀『評新編歷史劇「海瑞罷官」』	吳越石	96
義的毒草	學 錄	47	吳晗同志是個階級調和論者	馮沅君	100
「海瑞罵皇帝」和「海瑞罷官」是反黨			論肯定與讚揚	華 山	104
反社會主義的兩株大毒草	閔鋒·林杰	59	大喝一聲“不許假冒”！	方延梁	109
「海瑞罷官」代表一種什麼社會思潮？	方 求	99	堅決粉碎冒牌的“一分為二”！	馬 立	117
第3輯			第5輯		
評吳晗同志的資產階級歷史觀	馬 岩	3	「海瑞罷官」的主題思想	戴不凡	3
吳晗同志“繼承”了什麼？	陸實·傅仲炎	19	「海瑞罷官」基本上應該肯定	羽 白	11
在絕對化的背後	孺子牛	25	試論海瑞和「海瑞罷官」	郝炳衡	24
為什麼替吳晗打掩護？	史紹賓	33	「海瑞罷官」的主題是什麼？	唐 真	31
從“投獻”看吳晗的“自我批評”	羅思鼎	37	「海瑞罷官」必須批判	劉元高	35
這是什麼樣的「自我批評」	蔡尚思	43	揭穿「海瑞罷官」的錯誤實質	張 益	43
歷史唯物論，還是階級調和論	唐長孺	49	吳晗同志的政治立場是「站穩了的」		
“罷官”主題問題是個大是大非問題	師 軍	59	嗎？	薛 舒	51
由佞海瑞談到真海瑞	商鴻達	69	對評海瑞的三點意見	黃 克	52
關於海瑞的評價	李 旭	80	南京大學歷史系師生討論海瑞評價問題		55
松江農民批判「海瑞罷官」——座談紀			吳晗同志取消了階級鬭爭	李国安	60
要		89	兩個敵對階級有一致的利益嗎？	萬良順	63
海瑞得到人民群眾擁護的主要原因	蔣星煜	101	對誰有利？——讀書隨筆	史 汀	67
也談「海瑞罷官」	馬 捷	104	論海瑞的評價不宜過高	張家駒	71
海瑞是鎮壓農民的劊子手 江西省社聯調查組		113	海瑞與「海瑞罷官」	林丙義	79
三種手法一個來源——評吳晗運用史料			“王子犯法”與“庶民共罪”嗎？	王禮明·梁仁潔·楊永華	87
的方法	陳惠仁	119	吳晗同志對後一代人“啓發”些什麼？	李 平	92
包公與海瑞	聞亦步	125	和機械唯物論進行鬭爭的時候到了	遇羅克	95
南包公——海瑞	蔣星煜	127	從一捧一罵看吳晗的反動立場	周宝林	101
第4輯			揭穿吳晗捧皇帝和“罵皇帝”的反動本		
海瑞的一條鞭法對誰有利？	陳匡時·徐連達·李春元	3	質	朱肖鼎	104



海瑞執行的王法究竟是什麼樣的法	張晉藩 108	「讓步政策」保存了農民戰爭的勝利果	
“似會相識”的論調	朱子明 113	實嗎？——與嚴北溟同志商榷	譚惠中 101
海瑞“剛直不阿”的反動性	聿格明 119	「告狀」雜談——隨筆四則	史汀 110
不能苛求古人	岸波 124	“清官”是反革命復辟的工具——清算	
第6輯		李平心反黨反社會主義的新罪行	華青 117
羽白同志枉費心機	伍干 3	是誰回避實質問題？——讀平心先生新	
論「平黎疏」及其他	杰鋒 13	作有感	葉逸珊 124
「論“清官”」質疑	康立 23	平心先生對誰發火？	康立 127
讀「論“清官”」	張尚謙 36	海瑞「清官」生活真相	韓國勁·周勝昌 131
關於“法定權利”和“習慣權利”的對		決不允許任意歪曲經典著作——讀束世	
話	康立 43	激「論改良，改革和讓步」後	師兵 135
折中主義的“清官”論必須反對	朱理章 53		
全面認識歷史上的清官	孔柏森 65	17 賀綠汀批判問題彙編 ——輯自一九六六年全年上海文	
北京學術界部份人士座談“清官”問題	75	滙報 楊開書報供應社編	
漫談清官	平心 107	香港 96 P. [9164]	
談所謂清官貪官	周谷城 112	上海音樂學院革命師生在無產階級文化	
清官的特点及其評價	束世澂 114	大革命中揪出反黨反社會主義分子賀	
正確評價歷史上的清官及其現實意義	丘日慶 120	綠汀	万里等 3
關於清官我見	郝炳衡 124	撕掉賀綠汀的“老革命音樂家”畫皮	李劍 11
我對“好官”的一些看法	韓鉄錚 126	徹底批判反黨分子賀綠汀的修正主義音	
第7輯		樂路綫——青年音樂工作者聲討賀	
為什麼行肯定“清官”，“好官”？	華山 3	綠汀反黨反社會主義罪行座談紀要	沈德皓等 21
漫談“清官”和“好官”	譚其驥 13	烏鴉的翅膀遮不住紅太陽——痛斥反黨	
撥開迷霧看“清官”	朱理章 31	毒箭《荒村夜笛》	錢苑 37
論“清官”	童書業 47	戳穿賀綠汀的反黨黑話	沈一鳴 39
我對於清官的認識	陳汝衡 52	不准賀綠汀誘騙青年走修正主義的邪道	
論“清”官不清	袁良義 59		俞麗拿等 42
關於評價歷史人物的標準問題和“循吏”		為保衛無產階級專政誓死戰鬥	
“清官”的分析批判問題	平心 77		阿旺·天珍·羅昌 45
應該一分为二地看待“清官”和“貪		粉碎夢想復辟資本主義的陰謀	張敦智·陳宥時 48
官”	習中文 93	革命的《火藥味》好得很	連波 50
關於清官	鄭天挺 96	用《山谷》黑名居心何在？	作曲系五年級學生 51
論“清官”的實質	唐蘭 110	永遠堅持革命的創作方向	錢竟平等 52
“清官”戲是為誰服務的？	倪墨炎 122	賀綠汀，你的反黨罪行抵賴不掉	陳遠貴 53
第8輯		無產階級革命音樂萬歲——駁賀綠汀對	
論“循吏”，“良吏”，“清官”的歷史評		革命音樂的污蔑	張同言·易傑祥 57
價法	平心 3	我們永遠高唱革命戰歌	賀平 60
反“清官”論	何芳川 25	用革命歌聲壓倒一切牛鬼蛇神	戎有年 63
關於「海瑞罷官」問題的討論論“告		革命歌曲越唱越有勁	鄭永發 65
狀」——駁吳晗	羅思鼎 33	第七屆“上海之春”工農兵作者聲討反	
究竟怎樣認識“讓步政策”	張海鵬·楊國宜 46	黨分子賀綠汀——我們無產階級堅決	
全面地理解“讓步政策”	姚鐸銘 57	占領音樂陣地	胡永槐 67
關於“讓步政策”問題討論簡介	吳英 64	粉碎賀綠汀的復辟陰謀	陸曉樞 71
也談“讓步政策”	王先進 76	永遠歌唱偉大的毛澤東思想	劉劍秋·徐臣 74
“讓步”一說應該取消	莫生 85	把賀綠汀之流打下台	褚明道 76
駁“讓步政策”論	杭文兵 87	一定要把資產階級“權威”老爺闖倒	沈錦溪 78

Oct
主体で
えられ
れてい
威嚇し
考えて
せしめ
る。第
につい
すぎな
に捉え
密な分
方にす
だが
国民政
克服す
人民大
対する
であっ
では
まで実
みてみ
内政
べく、
生産人
て、「生
によれ
な手続
から正
当させ
派遣し
を行っ
全郷の
特派員
階で、
県の委
のであ
これ
西部の
に拡大
特派員
り、流
授田規
人民に
法が施
を要す



徹底打倒資產階級“權威”
施宝珍·盧嘉修·陳佩芬 80

讓一切牛鬼蛇神在革命歌聲面前發抖！
姜林根 82

堅決拔掉音樂界的大毒草——上海鼎華
漕公社部分貧農下中農批判賀綠汀的
反動謬論
侯銀娣 84

砸爛賀綠汀的反黨『夜笛』
謝春發 87

廣大工農兵痛斥反黨反社會主義分子賀
綠汀
張冠華 89

不準攻擊偉大的毛澤東思想
邢根宏·陳麗泓·王哺 91

決不讓毒草泛濫
范鶴英 93

駁斥賀綠汀的反動人性論
劉福安 94

18 周揚批判問題彙編——輯自一九六六年全年上海文匯
報 楊開書報供應社編
香港 2冊 [9108]

上冊

徹底清算周揚反黨反社會主義的罪行 鄭季翹 3

周揚顛倒歷史的一支暗箭——評〔魯迅
全集〕第六卷的一條注釋 阮銘·阮若瑛 23

徹底粉碎周揚黑幫詆毀魯迅的大陰謀
紅纓·長劍 39

從黑幫手中奪回文藝領導權 王貴寶 50

一本資產階級反攻倒算的變天賬——評
〔中國電影發展史〕 丁學雷 51

周揚黑幫言甜心毒 韓鶴年 76

周揚是製造大毒草〔海瑞上疏〕的罪魁 解集文 77

要我們工人再做牛馬辦不到 吳阿寶 82

在文化大革命中活學活用毛主席〔講話〕
徹底揭露周揚黑幫的修正主義謬論
——記南京部隊某部部份宣傳工作者
·文化工作者的一次講用會 83

拿起筆來向〔三十年代〕黑幫開火 湯泗涇 92

徹底撕毀假紅旗粉碎周揚大陰謀——參
加全國青年業餘文學創作積極分子大
會上的上海工人作者批判文藝黑幫首
領周揚座談紀要 93

下冊

中共中央宣傳部最近舉行會議高舉毛澤
東思想偉大紅旗聲討文藝黑綫總頭目
周揚的罪行 3

駁周揚的修正主義文藝綱領 武繼延 14

評“文科教材”——周揚在學文科復
辟資本主義的一個大陰謀 羅思鼎 37

徹底肅清“國防歌曲”的流毒 高 建 54

周揚顛倒歷史的又一罪証 59

見了影子都害怕的鬼魅 61

揭露周揚黑幫毒害腐蝕青年一代的罪行 63

控訴周揚在我身上大搞“和平演變” 殷承宗 65

評周揚的“全民文藝” 黎 帆 69

千秋萬代歌唱毛主席 陳立炎 84

戮穿周揚「全民文化」的鬼話 呂其瑞 85

徹底粉碎周揚利用文科教材推行修正主
義路線的陰謀——華東師範大學革命
師生批判周揚在文科教材編選計畫會
議上講話的座談紀要 87

革命的“火藥味” 萬才 艾錦泉 101

打倒電影界反動的『老頭子』 宋 崇 109

把周揚黑幫打得落花流水 趙萊靜 114

偉大的軍隊不容誣蔑 李景祥 118

駁周揚的所謂“自由競賽”論 陳阿發·王俊章 122

周揚鼓吹什麼樣的“自己的思想” 張明高 126

粉碎周揚復辟資本主義的陰謀
鄒定國·王正年·鄧慶沢 128

砍倒周揚的“全民文化”的修正主義黑
旗 周石振 131

“國防文學”就是投降文學 艾錦泉·楊化桂 134

周揚是反革命『個性』的狂熱鼓吹者 邵約拿 138

不許周揚為反動戲劇爭地盤 馮守良·張塘生 141

堅決粉碎周揚的“變天”陰謀 張冠華 143

痛斥周揚阻撓出版毛主席著作的反革命
罪行 樓力耕 145

烏鴉的翅膀擋不住金色的太陽 陳元龍 147

毛澤東思想使我們心明眼亮 陳福海 149

周揚的『共鳴』論是修正主義的黑貨 王景堂 152

駁“共鳴”論 陳吉士 154

歌頌黨和毛主席是永恒的主題 王立業 156

不許周揚毒害工農兵 馮德起 157

控訴周揚阻撓出版毛主席著作的罪行 159

周揚的罪惡活動徹底破產 161

不准周揚利用電影搞反革命復辟 163

周揚為什麼吹捧《打金枝》 165

19 翦伯贊批判問題彙編——輯自一九六六年全年上海文
匯報
香港 楊開書報供應社 116 P. [9316]

翦伯贊同志的歷史觀點應當批判 戚本禹·林杰·閻長貴 3

評翦伯贊的「中國史綱要」 司馬洪濤 25

翦伯贊怎樣吹捧人民公敵蔣介石？ 鄭仲兵 39

評翦伯贊的“江南之行”——揭露翦伯

府はこ
う。
民主共
民・労
大会に
受けて
命政府
(2)国
疾の平
主義勢
の発展、
政策と
2)計口
3)民族
(4)身
・罷工
あげら

らば、
思想を
加、人
すべ
るところ
中国
意図か
つたつ
の発展
義的傾
地の後
つ志向
策作成
一層明

我們的
帝国主
の主体
う条件
した現
く、労
の下で
という
主義か
る、と
ジョア

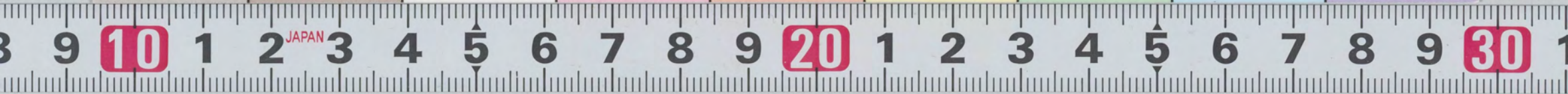
おいて



贊在華東師範大学歴史系報告的反動 實質 葛明 54	主義建党路線 紅聯総 27
翦伯贊の「讓歩政策」論是為人民公敵 蔣介石服務的 江西省社聯・吉安専区社聯調査組 62	中国赫魯曉夫鼓吹の「全民党」是復辟 資本主義的工具 北京衛戍区学習毛主席著作中心組 50
反共知識分子翦伯贊の真面目 戚本禹・林杰・閻長貴 78	必須用無産階級世界觀建設無産階級の 党——評中国赫魯曉夫「作一個好的 黨員，建設一個好的党」 通訊兵機關無産階級革命派 65
翦伯贊の「歴史主義」对我的毒害 杜仲文 97	資産階級反革命的戰略与策略——評中 国赫魯曉夫の「中国革命的戰略与策 略問題」 閻長貴 80
必須把史学革命進行到底 尹達 100	徹底批判中国赫魯曉夫の投降主義 程理嘉 112
20 陶鑄は無産階級專政の死敵 香港三聯書店編 香港 1967 84 P. [8184]	一個投降主義的反動綱領——駁中国赫 魯曉夫の所謂「和平民主新階段」論 任立新 127
炮轟陶鑄——上海時代中学革命小將陸 榮根同志遺作 1	徹底批判中国赫魯曉夫の投降主義哲学 ——「合二而一」論 華北局紅聯反修戰闘隊 147
陶鑄は無産階級專政の死敵 任志左 28	是「工運領袖」還是頭号工賊？——徹 底批判中国赫魯曉夫的反革命修正主 義工運路線 全国総工会「革聯」 162
撕下老牌機會主義者陶鑄の画皮——評 反動小説「小城春秋」 吳泰昌等 43	党内頭号野心家は鼓吹「全民文芸」の 罪魁 首都批判資産階級反動学 術「權威」聯絡委員会 178
極「左」の偽装掩蓋不了極右の實質 海軍直屬機關「紅聯総」 54	中国赫魯曉夫和所謂「三十年代文芸」 曉東・侯作卿 195
徹底清算陶鑄推行修正主義文芸路線的 罪行 辺切 62	打倒修正主義教育路線の総後台 師延紅 210
徹底粉碎陶鑄的反革命修正主義文芸綱 領 広州部隊批陶小組 75	不是先後之爭，是兩条道路的尖銳闘争 ——戳穿中国赫魯曉夫提出先機械化 後集体化謬論的罪惡陰謀 張懷英 225
21 徹底批判中国赫魯曉夫的反革命修正主義 香港三 聯書店編 香港 1967 271 P. [8183]	批臭中国赫魯曉夫的反革命「生産力論」 首都紅衛兵報編輯部 237
無産階級世界觀還是資産階級世界觀 ——駁中国赫魯曉夫所謂「吃小虧， 佔大便宜」和公私「溶化」論 任立新 1	批臭中国赫魯曉夫の經濟主義 反修兵 246
徹底批判「階級闘争熄滅論」的反動謬 論——駁斥中国赫魯曉夫一九五七年 「在上海市黨員幹部大会上的講話」 反修兵 13	工賊的表演和海河的見証——斥中国赫 魯曉夫解放初期在天津發展資本主義， 打擊社会主義的罪行 天津大学《八・一三》雜誌編輯部 256
戰無不勝の毛沢東思想是我党建設の靈 魂——徹底批判中国赫魯曉夫の修正	

1933
帝・反
日・米
は、福
ては国
として
れた人
すここ
あえな
一方
ヴィエ
定」を
軍も支
の点を
当時の
多くの
一戦線
る極左
つまり
いたが
ぎない
おける
上げる
發展的
な客観
て、最
展望を
統一戦
何であ
って異
いかな
それが
また、
者双方
おいて
情が作





近代中国研究センター彙報 No. 15

1971年10月10日発行 頒価 300円

編集発行 近代中国研究センター

東京都文京区本駒込2丁目28番21号東洋文庫

